## 遠野物語

柳田国男

青空文庫

この書を外国に在る人々に呈す

望す。 願わ 思うに遠野郷にはこの類 あらざれども誠実なる人なり。 めて夜分お この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。 くは 玉 これ 内 りお 0 を語りて平地人を戦慄せしめよ。 Щ 対にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山 り訪ね来たりこの話をせられ <sup>たず</sup>き の物語 なお数百件あるならん。 自分もまた一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり。 しを筆記せしな この書のごときは 昨明治四十二年の二月ごろよ 我々はよ 1)。 陳勝呉 広 り多くを聞か 鏡石 君は 人の伝説あるべ 話上手 0) んことを切 える。 いり始 には

たる り。 その 或 昨 他 は 年 つの田を続けて稲の色の同じきはすなわち一家に属する田にしていわゆる て水はことごとく落ちて川にあり。 の多きこと諸国その比を知らず。 馬を駅亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。 新道な ほ 凣 ただ青き山と原野なり。 月の を掛けたり。 るが 末自分は遠野郷に遊びたり。 故に民居の来たり就ける者少なきか。 虻多きためなり。猿ヶ石の渓谷は土肥えてよく拓けたり。あぶ 人煙の 稀 少なること北海道 石 狩の平野よりも甚だし。 高処より展望すれば早稲まさに熟し 稲 花 な 巻き の色合いは種類によりてさまざまない。 巻より十余里の路上には町場三ヶ所あまき 遠野の城下はすなわち煙花 その馬は黔き海草をもっ ij は t 花 盛 路傍に 三つ四 て作 0) ij 街 0) ij な

て側にかたわら ちあか き売買 黄<sup>た</sup>ぞがれ 昏れ 色は 満 中 つけ わ Щ 走 可 目 0) きな は げ た き物 野 黒に どもな 形 は徐む て魂を 地 あ る 鳥 色 は 譲 雨め を去 白き 写の ħ 面 1 な に 菅<sub>げがさ</sub> る 風 祭のかぜまつり Bを被り童子T ども さささか にる お 青 ベ ることを知 来た ら 招く 羽 旅愁を 証 Ĺ 聞 文に ま のごとくま きが 小さまざ 風ふ りて包 ひらめきて とする者とか じ 細き 藁人形 あ i) は常に 11 り。 たり。 か た 五六人 れ 田 よりさらに小さき区域 容 んともする能力を 曱 1) 0) 。。とうげ 徒多 6た片仮名( 見ゆ の道 尽 剣を抜きてこれ 日 天 始 < V) 馬 は 村 神 め を行 る あ ij そ 傾きて 岡 た 上 0) は 所 0) ij めに に け . О 緑 山 な 0) 小さき鶏 あたか Ŀ E ば ^ り。 お に わ は祭あ , , بخ 風吹 の字 に 映 名を. 遠 入りこみ 野 りき。 灯 7 Ü 附馬 牛つくもうし こたり。 東西 き酔 か 知 に が地 もくたびれたる人のごとく 郷 ととも 火見え には : と 思 5 似 りて 盂蘭な 名は たる旅 を指点 め た 11 り。 て人呼ぶ に 獅子踊 鳥 獅 **,** , 0) ケ所 持 舞うな あ 谷 盆ん 子 鉦ね が する この に 踊 V) 主にあらざれば 人とま って雛を対 溝ぞ 新 越 0) 0) لح 音聞 谷は 1)。 観 しき仏 者 1 あ ゆ にこの 0) くうは鹿のしか 草 Ŋ 音 た 0) れ は早池峯はやちね 声 え 堂 か 連っ 稲 笛 , も 沐ざ た 旗 ここ 隠 あ 0) あ れ 熟 0) り。 の舞い i) 悠らゆう る家 調 + れ す て横ぎり 、 仰 い ぎょうが に 子 ることさら て見えざれ 所 れ 道 は < 高 な 0) 0 ij ち 木 た あ 女 < み Ш を 紅 して が ij は 歌 は を る 白 は 知 え 霊 笑 l) 5 は 鹿 軽 0) あ のくさ ば 旗 つ Ш 村 11 低 0) 角の 児は ・塵た ij 7 す 遅 霞す と 人 を 雛 を な 0) 2 0)

り。以上は自分が遠野郷にてえたる印象なり。

納言殿 る存 意と誠実の態度とにおいてはあえて彼を凌ぐことを得という能わざらんも人の耳を経るこ りという人あらば如何。 するを恥とせり。 と多からず人の口と筆とを倩いたること甚だ僅なりし点においては彼の淡泊無邪気なる大きのからずんのいては彼の淡泊無邪気なる大きのでき りたがらざる者果してありや。 今の事業多き時代に生まれながら問題の大小をも弁えず、その力を用いるところ当を失え すでに陋かつ決してその談の 妄 誕 にあらざることを誓いえず。 窃にもってこれと隣を比ろう 時にありてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。 人の中にはあることなし。 な本を出版し自己の いう人あらん。 思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。 在理由ありと信ず。 かえって来たり聴くに値せり。近代の 御 伽 百 物 語) されどあえて答う。 要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもってするも立派な · 狭っきょうあい 明神の山の 木 兎 のごとくあまりにその耳を尖らしあまりにその ただ鏡石子は年わずかに二十四五自分もこれに十歳長ずるの いわんやわが九百年前の 先 輩 なる趣味をもって他人に強いんとするは無作法の仕業なりとしている。 そのような沈黙にしてかつ慎み深き人は少なくも自分の かかる話を聞きかかる処を見てきてのちこれを人に いかに印刷が容易なればとてこん 『今昔物語』のごときはその当 の徒に至りてはその志や たとえ敬虔 語

眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非もなし。この責任のみは自分が負わ

ねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

柳田国男

一六	家の神
	ゴンゲサマ
七二—七四	カクラサマ
九八	里の神
二、六九、七四	神 の 始
一、五、六七、一一一	地勢

題目(下の数字は話の番号なり、ページ数にはあらず)

山男	天狗	神女	山の神	ザシキワラシ	オシラサマ	オクナイサマ
五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二	二九、六二、九〇	二七、五四	八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇八	一七、一八	六九	一四、一五、七〇

昔の人	館の址	姥神 <sup>うば</sup>	塚と森と	蝦夷の跡	仙人堂	山の霊異	
八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四	六七、六八、七六	六五、七一	六六、一一一、一一三、一一四	——————————————————————————————————————	四九	三二、三三、六一、九五	3 B B 3 3 4 3

	雪女
二三、七七、七九、八一、八二	まぼろし
二二、八六—八八、九五、九七、九九、一〇〇	魂の行方
二〇、五二、七八、九六	前兆
六三、六四	マヨイガ
一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三	家の盛衰
八〇、八三	家のさま

狼がぬ 猿の 経 立 ふったち 熊 川 童 花 色々の鳥 狐 猿 六〇、九四、一〇一 四七、四八 五一一五三 四五、四六 五五—五九 四三

歌 音 々 雨風祭

小正月の行事

一 五 一 一 八

一 九 = | |-|

なせ 保とも す。 町に 上みが 川わ 下な なりし ij 内は沢または谷のことにて、 至る。 しな 遠と を渡 呼べり。 ン 野郷 ジョラ 達曾部の らりと。 城を横田城 ίĵ, その水猿 山 遠野、 奥には珍しき繁華 は今の その川の支流猿ヶ石川の渓を伝いて、 されば 今日 の 一 土淵、附馬牛、この陸中上閉伊郡の西のいかみへい 町十ケ 郡役所 ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、 谷川 とも 村に分か いう。 0) のこの猿ヶ石に落合うも あ の地なり。 る遠野町 奥州 この地へ行くには う。 の半分、 の地名には多くあり。 松崎、 近代 はすなわ 伝えいう、 或 青笹、 いは 山々に ち一郷の 花 花 巻 き の甚だ多く、 西閉伊郡とも称し、 遠野郷の地大昔はすべて一 て取り囲まれたる 東の方へ入ること十三里、 上郷、小友、 の停車場にて汽車を下り、 町場にして、 自然にかくのごとき 俗に七内八崎 綾おり 南部家一万石の城なんぶけ 平地な 中古にはまた遠野 り。 こ 邑 落 円の湖水 あ 鱒 ますざわ 遠野 りと称 北き か 0

遠 郷 0 1 はもとアイヌ語 の湖という語より出でたるなるべし、 ナイもアイヌ

り。

遠野 里の 奥よ 0) 町は南北の川の落合にあり。 ij っ 売いばい の貨物を聚め、 その市の日は馬千匹、 以前は七七十里 人千人の賑わ とて、 つの渓谷お しさなりき。 のお 0) 兀

りも劣れ 豆権現 神 の語 山 山 ij 々 i) 귟 の社あるところに宿りし夜、 0) て寝たり 7 中に最 ŋ̈́ 大昔に女神あり、 も秀でたるを早池峯という、 しに、 石い 神が 神み という山は附馬牛と達曾部とのたっそべ 夜深く天より霊華降りて姉の姫のひめ 三人の娘を伴ない 今夜よき夢を見たらん娘に 北の方 てこの高原 7附馬牛 蕳 胸 に の上 に来 あ りて、 の奥に に止 よき山を与うべ たり、 あ I) そ ij 今の の高 を、 来 ら い な い き前 東 の方 末 0 0) には六る 村 姫 لح 二つよ 眼め 母: 0 伊い

たもう故に、 姉たちは六角牛と石神とを得たり。 遠野の女どもはその妬を畏れて今もこの山ねたみおそ 若き三人の女神お のお には遊ば の三の・ ずといえ 山 に 住し今もこれ ij を領

めて窃にこれ

を取

り、

わ

が

胸

の上に載せた

りし

かば、

つ

V)

に最

も

美し

き早:

池峯

0)

Ш

を

- ○タッ・ ソベ 里は小道すなわ もアイヌ 語なるべ わち 坂東道・ し。 岩手 なり、 郡玉 山村に 里が五 も同じ 丁または六 大 お お お お あ ざ 丁な あり。 l)
- Ě 郷 村大字来 内 ライナイもアイヌ語にてライは死のことナイは沢 なり、 水 の静 か な

る

ょ

i)

0)

名

山 長き黒髪を梳りていたり。 々 0) 奥には の翁若かり Ш 人住めり。 しころ猟をして山 栃 と ちない 顔の色きわめて白し。 村 和ゎ |奥に 野の 入 の佐々木嘉兵衛 りしに、 遥る か 不敵の男なれば直に銃を差し向ただちつつ なる岩の上に美し という人は今も七十余にて き女 生 あ

近きころ亡せたり。

催しければ、 切り ち去ると見ればたちまち睡は覚めたり。 て打ち放せしに弾に応じて倒れたり。そこに馳けつけて見れば、 きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。 これも丈の高き男一人近よりて懐中に手を差し入れ、 取り、 これを綰ねて懐に入れ、 しばらく 物 蔭 に立寄りてまどろみたり。 やがて家路に向い 山男なるべしといえり。 のちの験にせばやと思いてそ しに、 その間夢と現との境のようなる。 かの綰、 道の程にて耐えが ね 身のたけ高き女にて、 たる黒髪を取り返し立 の髪をいささか たく 睡 眠 時 を

## 〇土淵村大字栃内。

常の 若き女の 穉 児 を負いたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。 りたり。 几 て立上らんとする時、 か行き過ぎたり。 縞 物 なれど、裾のあたりぼろぼろに破れたるを、しまもの Щ これも長き黒髪を垂れたり。 П 村 足は地に着くとも覚えず。 の吉兵衛という家の主人、 この人はその折の怖ろしさより煩い始めて、 笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、 事もなげに此方に近より、 児を結いつけたる紐は藤の蔓にて、 根子立という山に入り、ねっこだち いろいろの木の葉などを添えて綴っっ 男のすぐ前を通 久しく病みてありしが、 笹を苅りて束となし担ぎ きわめてあでやか 奥の方なる林の 着たる衣類 辿りて 何 方 中よ は な 世 る 女 i)

主 遠 淵 野 7郷より 村大字山 海岸の田、 吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた吉兵衛ならん。 吉利吉里などへ越ゆるには、きゅきり 昔より 〜笛吹峠 という 山 やまみ

路ち五 山 中 あ にて 1) に 別 の路を 必ず山 山 П 村より う境 木 峠・ .男山女に出逢うより、 六角 件 という方に開 の方へ入り路のりも近かりし 誰もみな怖ろしがりて次第 き、 和や 山ま を 馬 次 場 として今は此方ば かど、 に往来も稀に 近年この峠を越ゆ な か i) i) を越 かば、

Щ は六 角牛に登る 山 口な れば 村の名となれるなり。 るように

な

れ

1)

里

以上

一の迂路

な

り。

の女に 驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。 物に 六 れば疾く帰れ に取られて今はその妻となれり。 取 遠野 遭 う。 り隠されて年久しくなりしに、 郷に とい 7 怖ろしくなりてこれを撃たんとせしに、 お は 0) れ 豪農のことを今でも長者という。 うままに、 はこの地に一 その 在所をも問い明らめずして遁げ還れ 生涯を送ることなるべし。人にも言うな。 子もあまた生みたれど、すべて夫が食い尽 同 じ 村の何某という猟師、 何故にこんな処にはおるぞと問えば、 青笹村大字 何おじではな <sup>,</sup> 糠 前 V 或 る か、 の長者  $\exists$ 山に *:*[. 御 つなという。 て 身 の娘、 入りて一人 ŧ 危うけ 人 或る ふと 此 0) 物

糠 の前は糠の森の前にある村なり、 糠の森は諸国の糠塚と同じ。 遠野郷にも糠森

と思わる。

塚多くあり。

かる 窟のようになれるところにて、図らずこの女に逢いたり。 持ち来たるを見れば町へも出ることならん。 かるにその村の者猟をして 五 葉 山 の腰のあたりに入りしに、 らんと思い、 七 知れずという故、 る人四五人集まりきて、 衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。 子供も幾人か生みたれど、 と問うに、 に来たるなり。 いずれへか持ち去りてしまうなりという。 山にはおるかと問えば、女の曰く、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところ 上 郷 村の 自分には並の人間と見ゆれど、ただ丈きわめて高く眼の色少し凄しと思わまみ 女の 民家の娘、 遁げて帰らんと思えど些の隙もなしとのことなり。その人はいかなる人かに 猟師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことか したる枕を形代として葬式を執行したる枕を形代として葬式を執いたしる 何事か話をなし、やがて何方へか出て行くなり。 栗を拾いに山に入りたるまま帰り来たらず。 我に似ざれば我子にはあらずといいて食うにや殺すにや、みな まことに我々と同じ人間かと押し返して問えば、 かく言ううちにも今にそこへ帰って来るかも 一市間に一度か二度、ひといちあい **!**` 互いに打ち驚き、 大なる岩の蔽い さて二三年を過ぎたり。 家の者は死したるな 食物など外よ **,** , か か 同じような にしてか か りて岩 る。 i)

市間は遠野の町の市の日と次の市 の日の間なり。 月六度の市なれば一市間はすなわ

五. 日 のことなり

たり。 に浜 は、 松崎村の寒戸というところの民家にて、 ろの上を過ぎたり。 九 八 行く時などは、 えば人々に逢いたかりし故帰りしなり。 を知らずなり、 しところへ、きわめて老いさらぼいてその女帰り来たれ 黄昏に女や子供の家の外に出ている者はよく 神 隠たそがれ 菊池弥之助という老人は若きころ駄賃を業とせり。 きょうはサムトの婆が帰って来そうな日なりという。 へ越ゆる境木峠を行くとて、 その この時谷の底より何者か高き声にて面白いぞーと呼ばわる者あり。 自は よく笛を吹きながら行きたり。 風 三十年あまり過ぎたりしに、 の烈しく吹く日なりき。 大谷地は深き谷にて また笛を取り出して吹きすさみつつ、大谷地 若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるま 白らかんば さらばまた行かんとて、 されば遠野郷の人は、 或る日親類知音の人 ある の林しげく、その下は葦など生じ湿りた 薄 月 夜 に、 うすづきょ 笛の名人にて夜通 1) しにあうことは他の国々と 11 か あまたの仲間 今でも風の騒がしき日に 再び跡を留めず行き失せ にして帰って来た 々その家に集まり しに馬を追いて というとこ の者ととも 6ま行方 か Ź 同 لح あ 問 l)

とく色を失い遁げ走りたりといえり。

る沢なり。

同ことご

〇ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり、 内地に多くある地名なり。 またヤツともヤトとも

じ夜、 ろにてきゃーという女の叫び声聞え胸を轟か 時も この男ある奥山に入り、茸を採るとて小屋を掛け宿りてありしに、 同じ刻限に、 自分の妹なる女その息子のために殺されてあ したることあり。 里 一へ帰 うりき。 りて見れ 深夜に遠きとこ ば、 その同

ば親里へ行きて帰り来ざることあり。 り来たり、 る ころになり突然と倅のいうには、ガガはとても生かしては置かれぬ、今日はきっと殺すべい。せがれ 便器を持ち来たりてこれへせよという。 でて泣きながら諫めたれど、露従う色もなく、 言とも見えざれば、 前後 .炉裡の側にうずくまりただ泣きていたり。倅はよくよく磨ぎたる大鎌を手にして近よっ りかたわら この女というは母一 大なる 草 苅 鎌 を取り出し、ごしごしと磨ぎ始めたり。 の戸口をことごとく鎖したり。 まず左の肩口を目がけて薙ぐようにすれば、鎌の刃先炉の上の火棚に引っかかまず左の肩口を目がけて薙ぐようにすれば、鎌の刃先炉の上の火棚に引っかか 母はさまざまに事を分けて詫びたれども少しも聴かず。 人子一人の家なりしに、嫁と姑との仲悪しくなり、ょめしゅうと その日は嫁は家にありて打ち臥しておりし 便用に行きたしといえば、 夕方にもなりしかば母もついにあきらめて、 やがて母が遁れ出でんとする様子あるを見 そのありさまさらに 戯 おのれ みずから外よ 嫁も起き出 嫁は しば 昼の 大な 1)

流る りてよく斬れず。 廻しなどせしが、 を聞きて心を動かさぬ者はなかりき。 てある時代のことなり。 里 人ら驚きて馳せつけ倅を取り抑え直に警察官を呼びて渡したり。さとびと ょ おさ おさ 二度目には右 る中より、 おのれは恨も抱かずに死ぬるなれば、 その時に母は深山の奥にて弥之助が聞きつけしようなる叫び声を立てた 狂人なりとて放免せられて家に帰り、 の肩より切り下げたるが、これにてもなお死絶えずしてあるところへ、 母親は男が捕えられ引き立てられて行くを見て、 孫四郎は途中にてもその鎌を振 孫四郎は宥 今も生きて里にあ したまわ 警官がまだ棒を持ち り上げて巡査を追い ij れと 滝のように血 これ 0)

○ガガは方言にて母ということなり。

伝説 病みてまさに死なんとす。 年 頃 遠野郷の昔の話をよく知りて、ゃ の館の主の伝記、 家 々 の盛衰、 たしと 口 癖 一二土淵村山 またはその奥に住める人々 のようにいえど、あまり臭ければ立ち寄りて聞かん .口に新 田 乙 蔵 という老人あり。 村の人は 乙 爺 という。 の物語など、この老人最もよく知 昔よりこの郷に行われ し歌の数 々を始めとして、 とする人なし。 誰かに話 して聞かせ置き 今は九十に近く 処々 深山の

この老人は数十年の間山の中に独りにて住みし人なり。 乙爺は明治四十二年の夏の始めになくなりたり。 よき家柄なれど、

りあわれなる暮しをなせり。 ろ財産を傾け失いてより、世の中に思いを絶ち、峠の上に小屋を掛け、 入の余あれば、 人に売りて活計とす。 駄賃の徒はこの翁を 父 親 酔えば、 町 町に下りきて酒を飲む。 の中を躍りて帰るに巡査もとがめず。 赤毛布にて作りたる半纏 のように思いて、親したした いよいよ老衰して後、 を着て、 しみたり。 甘酒を往来 赤き 頭巾を ずきん 旧里に帰きゅうり 少しく収 0)

枕を反すなどは常のことなり。或いは誰かに抱き起こされ、メインら かぇ も正 を祭る。 上より通して 衣 裳とす。 兀 戸の 大同 部落には必ず一戸の旧家ありて、オクナイサマという神を祀る。ぶらく の家には必ず畳 一 帖 の室あり。この部屋にて夜寝る者はいつも不思議に遭う。 へゃ ょるね 十五日に 里 人 集まりてこれを祭る。 その式には 白 粉じるい またオシラサマという神あり。この神の像もまた同じようにして造り設け、これもった。 正月の十五日には 小 字 中 の人々この家に集まり来たりてこれ 子供はすべて北海道へ行き、 翁ただ一人なり。 または室より突き出さるるこ 粉を神像の顔に塗ることあ その家をば大同 これを

○羽後苅和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあ ○オシラサマは 双神なり。 アイヌの中にもこの神あること『蝦夷風俗彙聞』に見れているだ。

およそ静かに眠ることを許さぬなり。

り。これと似たる例なり。

だん その扉を開き見れば、 に植 家という。 てまたその影見えず。 て尋ねたれど見えず。 を植え残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方よりともなく丈低き小僧を植え残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方よりともなく」とほくこそう Ŧi. えは に座敷に入り、 お のれも手伝い申さんというに任せて働かせて置きしに、 オ てたり。 クナイサマを祭れば幸多し。 この家にて或る年田植の人手足らず、 どこの人かは知らぬが、 オクナイサマ 神像 家に帰 やがて再び帰りきて終日、代を掻きよく働きてくれし の腰より下は田 りて見れば、 0) 神 か み だ な 土淵村大字 縁<sup>えんが</sup>わ の泥にまみれていませし由。 のところに止りてありしかば、 晩にはきて物を食いたまえと誘 明ぁ 日す に小さき泥の足跡 柏りわざき とどま [は空も怪しきに、 長者阿部氏、 午飯時に飯を食わひるめしどきめし あま わずか たあ ζì さてはと思い 村にては田圃たんぼ しが、 かば、 りて、 ば 人 か そ せ 来 日 I) だん  $\bar{\lambda}$ 暮 0) た 0) れ H と V) 田 0)

とその事少な サ マ コン 0) 社 セサマを祭れる家も少なからず。 くなれ は 里に多くあ i) ij 石または木にて男の物を作りて捧ぐるなり。 この 神の神体はオコマサマとよく似たり。 今はお 1 お 才

三ばかりの童児なり。 にはザシキワラシという神の住みたもう家少なからず。 おりおり人に姿を見することあり。 土淵村大字飯豊の 今 淵 この神は多くは十二 勘十郎

を鳴らす音あり。 さという音あり。 下にてはたとザシキワラシに行き逢い大いに驚きしことあり。 という人の家にては、近きころ高等女学校にいる娘の休暇にて帰りてありしが、或る日廊 同じ村山口なる佐々木氏にては、 しと思いて板戸を開き見るに何の影もなし。 久しき以前よりの沙汰なりき。この神の宿りたもう家は富貴自在なりということ さては座敷ワラシなりけりと思えり。この家にも座敷ワラシ住めりとい この室は家の主人の部屋にて、 母人ひとり 縫 物 しておりしに、次の間ぬいもの しばらくの間坐りて居ればやがてまた頻に鼻しばらくの間坐りて居ればやがてまた頻に鼻 その時は東京に行き不在 これは正しく男の児なりき。 の折な にて紙のがさが れば、 怪

なり。

思わしき様子にて此方へ来たる。 がところからきたと答う。 某という男、 家には、 一八 ザシキワラシまた女の児なることあり。 ○ザシキワラシは座敷童衆なり。 その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮せる豪農なり。 童女の神二人いませりということを久しく言い伝えたりしが、或る年同じ 町より帰るとて留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢え これから何処へ行くのかと聞けば、それ お前たちはどこから来たと問えば、 この神のこと『石神問答』 同じ山口なる旧家にて山 中にも記事あり。 さては孫左衛門が世も の村の何某が家にと答 おら山 口孫左衛門という の孫左衛門 ij 村の何 物

日 末だなと思い のうちに死 に絶え、 しが、 それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸の毒に中り 七歳 の女の子一人を残せしが、 その女もまた年老いて子なく、 近き

噌の類までも わん き近き親類の人々、 帰ることを忘れ ころ病みて失せたり。 とくこれを食いたり。 もってよくかき廻してのち食えば決して中ることなしとて、一 くなりたり。 しと制 九 か 食うまじきかと男どもの評議 孫左 したれども、 衛門が家に 取り去りし しために助かりたり。 或 下男の一人がいうには、 ては、 七歳 いは生前に貸ありとい つかば、 、 の女の児はその日外に出でて遊びに気を取られ、 或る日梨の木のめぐりに見馴れぬ茸のあまた生えたるを、 この村草 分さわけ してあるを聞きて、 不意の主人の死去にて人々 V) の長者なりしかども、 いかなる茸にても 或いは約束ありと称して、 最後の代の孫 水 ず 精 け 同この言に従 の動 朝にして跡方 左 転 の中に入れ 衛 U 菛 7 家 あ 昼 い家内ことご **外の貨財は味**み る間 一飯を食 食わ て芋殻を め もな が ょ 食 遠

鍬にて掻きまわせしに、ペゎ゚ して打ち殺したりしに、 この兇変の前にはいろいろの前兆ありき。 大なる蛇を見出 その跡より秣の下にいくらともなき蛇ありて、 したり。 これも殺すなと主人が制せしをも聴か 男ども苅置きたる秣を出すとて三ツ歯 うごめき出でたる 0)

屋敷 を、 の外に穴を掘りてこれを埋め、 男ども 面白半分にことごとくこれを殺したり。 蛇塚を作る。 その蛇は簣に何荷ともなくありた
ぁじか なんが さて取り捨つべきところもなければ、 にりとい

えり。

守り は、 ず庭の中に稲荷の祠を建て、いなりほこらた 近づけども遁げず。 りたり。 枚の 油がらげ 右の わが 少し変人という方なりき。狐と親しくなりて家を富ます術を得 孫左衛門は村には珍しき学者にて、 仏様は を欠かすことなく、 何ものをも供えざれども、 手を延ばしてその首を抑えなどしたりという。 自身京に上りて正一位の神階を請けて帰っている。 手ずから社頭に供えて拝をなせしに、 孫左衛門の神様よりは御利益ありと、 常に京都より和漢の書を取り寄せて読み耽い。 村にあ ij, のちには h と思 ij それより 薬師 い 立 狐 馴れて の堂 は たび どうも  $\Box$ 々 ま

ふと裏 喪も る 同座 囲いの 間 炉る 裡り は 敷 佐々木氏 口の方より足音してくる者あるを見れば、  $\overline{\mathcal{O}}$ 火の気を絶やすことを忌むがところの風なれば、 にて寝たり。 両りょうがわ の曾祖母年よりて死去せし時、そうそぼ に坐り、 死者の娘にて乱心のため離縁せられ 母人は旁に炭籠 棺に取り納め親族の者集まりきてその夜はかん 亡くなりし老女なり。 を置き、 たる婦人もまたその 祖母と母との二人の おりおり炭を継ぎて 腰かがみて 中に み I) あ りき。

たび笑いごとにしたりとなり。

とて、 にて、 衣物の裾の引きずるを、きものする の人なれば振り返りあとを見送りたれば、 裾にて 炭 取 にさわりしに、丸き炭取なればくるくるとまわり 縞目にも見覚えあり。 しまめ みおぼ 三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、まざまざとその通 あなやと思う間もなく、二人の女の坐れ 親縁の人々の打ち臥したる 座敷 たり。 る炉 の脇 の方へ近より行 母 人は を通 り行く

とする時、 し人の通りなりき。これは数多の人見たる故に誰も疑わず。 ○マーテルリンクの『侵入者』 同じ人の二七日の逮夜に、たいや 門 口の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。かどぐち を想い起こさしむ。 知音の者集まりて、夜更くるまで念仏を唱え立ち帰らん

そのうしろ付正しく亡くなり

いかなる 執 着

のありしに

つい

に知る人はなかりしなり。

の人々はこの声に睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといえり。

かの狂女のけたたましき声にて、

おばあさんが来たと叫びたり。

その余

くと思うほどに、

を混じたるに非ざるか 二四 村 々 0) 旧家を大同というは、 大同は田村将軍征討の時代なり。 大同元年に 甲斐国 より移り来たる家なればかくい 甲斐は南部家の本国なり。 二つの伝説

○大同は大洞かも知れず、 洞とは東北にて家門または族ということなり。 『常陸国志』

に例あり、ホラマエという語のちに見ゆ。

遠野 て取らすべしとて更に別の手紙を与えたり。 帰るさ、 わち下閉伊郡なり。 に巧なる人ありて、 は吉例として門松の片方を地に伏せたるままにて、 ・ 門 松 松 の町 この手紙を開きよみて曰く、 米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。この 宝 物 の力にてその家やや富有にな 果して若き女いでて手紙を受け取り、 早池峯より出でて東北の方宮古の海に流れ入る川を閉伊川という。はやちね 柏崎 大同 この け合いは の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩けば宛名の人いで来べしとなり。 を、 'の田圃のうちと称する阿倍氏はことに聞えたる旧家なり。 の祖先たちが、 川の 原 台 の淵というあたりを通りしに、 まだ片方 したれども路々 遠野一 遠野の町の中にて今は池の端という家の先代の主人、 はえ立てぬうちに早元日になりたればとて、 郷の神仏の像にはこの人の作りたる者多し。 始めてこの地方に到着せしは、 々 心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢えぬち これを持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。 その礼なりとてきわめて小さき石 臼 これを持ちて沼に行き教えのごとく手を叩き 標 し ぬ な わ 若き女ありて一封 あたかも歳の暮にて、 を引き渡すとのことなり。 この家の先代に彫刻 今もこの家々 の手紙を托す。 宮古に行きての その流域はすな 春の いそ

の旁にあり。 自ら回 りし中へ滑り入りて見えずなりたり。 引りて、 妻なる者慾深くして、 家の名を池の端というもその為なりという。 ついには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、 一度にたくさんの米をつかみ入れしかば、 その水溜りはのちに小さき池になりて、 小さき窪みの中 石臼はしきりに

○この話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや。

ば自らもまた取りて与えしに、嬉しげになお食いたり。 かり 南部家 入 部にゅうぶ こと昨日のごとし。 もまた来るならんと思い、 くるを見てありしが、 り。 の上に餅をならべ焼きながら食いおりしに、 始めて よく見れば大なる坊主なり。 この猟師半分ばかり道を開きて、 焼けて火のようになれり。 の後のことなり。 早池峯に 餅尽きてのちその白石をも同じように口に入れたりしが、 · 山 お 路 ち ついにこらえ兼ねて手をさし延べて取りて食う。 餅によく似たる白き石を二つ三つ、 をつけたるは、 その頃までは土地の者一人としてこの山には入りたる者な 案のごとくその坊主きょうもきて、 やがて小屋の中に入り来たり、 Щ 附馬牛村の何某という猟師にて、 の半腹に仮小屋を作りておりしころ、或るがりごや 小屋の外を通る者ありて頻に中を窺うさ 餅皆になりたれば帰 餅にまじえて炉 さも珍しげに 猟師 餅を取 i) も恐ろしけ 時は遠野の の 上 りて食う 餅 次 載  $\mathcal{O}$ 0) 焼  $\exists$ 

て小屋を飛び出し姿見えずなれり。 のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見たりといえ

1)。

○北 上川の中古の大洪水に白髪水というがあり、 白髪の姥を欺き餅に似たる焼石を食わっぱゅぎむ

るべしとて先に立ち、 光きわめて恐ろし。 前にあまたの金銀をひろげたり。この男の近よるを見て、気色ばみて振り返る、前にあまたの金銀をひろげたり。この男の近よるを見て、気色さ 師に登りたり。 掘るなど、 主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友なり。きわめて無法者にて、鉞にて草を苅り鎌にて土を主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友なり。きわめて無法者にて、鉞にて草を苅り鎌にて土を ている間に、 天狗住めりとて、 せし祟なりという。 鶏頭山は早池峯の前面に立てる 峻 峯 なり。麓の里にてはまた 前薬師けいとうざん 若き時は乱暴の振舞い ふるまい たちまち異人は見えずなりたりという。 帰りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、その岩の上に大男三人いたり。 早池峯に登りたるが途に迷いて来たるなりと言えば、然らば送りて遣や 麓近きところまで来たり、眼を塞げと言うままに、 早池峯に登る者も決してこの山は掛けず。 この話によく似たり。 のみ多かりし人なり。 或る時人と賭をして一人にて前がけ 山口のハネトという家の 暫時そこに立ち 、その ともい 眼の

茂りたる中に、 小国村の何某という男、 大なる男一人寝ていたるを見たり。 或る日早池峯に竹を伐りに行きしに、 地竹にて編みたる三尺ばかりの草履をできり 地竹のおびただしく

しとなり。

千晩ヶ岳は山中に沼あり。

この谷は物すごく腥き臭のするところにて、この

山に入

脱ぎてあり。仰に臥して大なる鼾をかきてありき。ぬいがきない。あおいかいびき

○下閉伊郡小国村大字小国。

○地竹は深山に生ずる低き竹なり。

遠野 郷の民家の子女にして、 異人にさらわれて行く者年々多くあり。 ことに女に多

死したり。 まで行きて 片 肢 折れたり。 を見てこれを追いこの谷に千晩こもりたれば山の名とす。 り帰りたる者はまことに少なし。 その地を死助という。 死 助 権 現 とて祀れるはこの白鹿なりという。 その山を今片羽山という。さてまた前なる山へきてついにかたはやま 昔何の隼人という猟師あり。 その白鹿撃たれて遁げ、 その子孫今もあ ij 次 白き鹿 (n) Щ

○宛然として古風土記をよむがごとし。

遠く望めば桐の花の咲き満ちたる山あり。 歌の声など聞ゆることあり。 採りに行き山中に宿する者、 白望の山に行きて泊れば、 この山の大さは測るべからず。 よくこの事に逢う。 深夜にあたりの 薄 明 るくなることあり。 あたかも紫の雲のたなびけるがごとし。 また谷のあなたにて大木を伐 五月に萱を苅 りに行くとき、 秋のころ茸を り倒す音、

らんとしたれどそれもかなわず。また来んと思いて樹の皮を白くし栞としたりしが、 て金の樋と金の杓とを見たり。 もついにそのあたりに近づくこと能わず。かつて茸を採りに入りし者あり。 日人々とともに行きてこれを求めたれど、 持ち帰らんとするにきわめて重く、 鎌にて 片 端 を削り取 ついにその木のありかをも見出しえずしてやみ 白望の山奥に 次の

窺う者を見たり。 三四四 び声を聞くことは珍しからず。 人の境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その小屋の 垂 菰 をかかげて、 白望の山続きに 離 森 というところあり。その小字に長者屋敷というは、 にゅぎ 髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。このあたりにても深夜に女の 全く無 内を 叫

たり。

やアと二声ばかり呼ばわりたるを聞けりとぞ。 なる森林の前を横ぎりて、女の走り行くを見たり。 佐々木氏の祖父の弟、 白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大やど 中空を走るように思われたり。 待てち

近き二ツ 石 山 は岩山なり。 三六 猿の 経 立 、御犬の経立は恐ろしきものなり。 御犬とは狼のことなり。 山口の村にったったち、 おいぬ の岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押しあぐるようにしてかわるがの岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押しあぐるようにしてかわるが ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、 ところど

来たり、

その足音山もどよむばかりなれ

ば、

あまりの恐ろしさに馬も人も一

所

に

集

ま

りて、

わる吠えたり。 、えり。 正面より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば 存 外で面より見ればす \*\*\* にはど物はものは 凄ご

境木峠, 御犬のうなる声 く恐ろしきものはな 昔は駄賃馬を追う者、

馬方らは夜行には、 7 い五六七匹までなれば、 と和山峠との間にて、 たい てい十人ばかりも群をなし、 常に 四五十匹 の馬の数なり。 その一人が牽く馬は ある時二三百ば しば しば狼に逢いたりき。 か 一端綱 I) Ó 狼 とて 追

中に そのめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。されどなおその火を躍り越えて入り来る には 飛び入らず。 馬 の綱を解きこれを張り回らせしに、穽などなりとや思いけん、っな、と 遠くより取り囲みて夜の明るまで吠えてありきとぞ。 それより Ó により、 ちは

吠ゆるを聞きて、 三八 穿ちて中に入 より来るようなり。 小友村の! 夜通し i)狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず。 旧家 酒に 馬 恐ろしくなりて急ぎ家に帰り入り、 の主人にて今も生存せる 某 爺 という人、町より帰 0) 酔い 七頭 たればお ありしをことごとく食い殺していたり。 のれもまたその声をまねたりしに、 夜明けて見れば、ょぁ 門の戸を堅く鎖して打ち潜みたれ 馬屋の土台の この家はそのころより 狼も吠えながら跡 りに頻に御犬の の下 を掘

産やや傾きたりとのことなり。

立て な る 鹿 0) 佐々木君幼きころ、 倒 祖父の曰く、 れ てあるを見たり。 これは狼が食いたるなり。 祖父と二人にて山より帰りしに、 横腹は破れ、 殺されて間もなきにや、 この皮ほしけれども御犬は必ずどこかこ 村に近き谷川 そこよりはまだ湯気 の岸 の上に、

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。 草 木の色の移り行くにつれて、 狼の

毛の色も季節ごとに変りて行くものなり。

の近所に隠れ

て見ておるに相違なければ、

取ることができぬといえり。

れぬ狼此方へ群れて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、 四一 の下を夥しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。 る原なり。 和野 秋 の佐々木嘉兵衛、 心暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。 或る年境木越の大谷地へ狩にゆきたり。 そのころより遠野郷には狼甚だ少なくな 樹の梢に上りてありし 向うの峯より何百ともむこ 死助の方より走れしすけ その 樹 知

外の村々の人馬にはいささかも害をなさず。 苅りに行く。 その二つを殺し一つを持ち帰りしに、 六角牛山の麓にオバヤ、 ある年の秋飯豊村 板小屋などいうところあり。 の者ども萱を苅るとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出 その日より狼の飯豊衆の馬を襲うことやまず。 飯豊衆相談して狼狩をなす。 広き 萱 山 なり。 その中には相撲 村々よ i)

れりとのことなり。

雌<sup>め</sup>す 狼 を取 れ  $\Box$ て近よらず。 0) 中に突き込みしに、 i) つ鉄という男に 平生力自慢 その 間 .飛び. に の者あり。 狼これを噛か 鉄 かかりたるを、 の腕は狼 さて野に出でて見るに、雄の狼は遠くにお の腹 む。 鉄も担がれて帰り程なく死したり。 ま な 6で入り、 お強く突き入れながら人を喚ぶに、 ワッポロを脱ぎて腕に 狼は苦しまぎれに鉄の腕 巻き、 やにわ りて来き 骨 で 噛<sup>か</sup> 誰 に そ も 誰も怖 み砕き たらず。 0) 狼

ワ ツ ポ 口 は 上 羽織 のことなり。 たり。

狼は

そ

の場

にて

死

したれども、

に近か はな 跡を 四三 その隙に獣の熊を打ち取りぬ。 もに雪 んと思えども力及ばず。やがて谷川に落ち入りて、人の熊下になり水に沈みた か りし め、 I) の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、 昨 かば、 牟 自分は峯の方を行きしに、 0)  $\overline{\phantom{a}}$ 遠野 銃をすてて熊に抱えつき雪の上を転びて、 新聞』 にもこの記事を載せたり。 水に も溺れず、爪の傷は数ケ所受けたれども命に障ること

おぼ

っめ

さわ とある岩の陰より大なる熊此方を見る。 熊の足跡を見出でたれば、 上かみごう 郷: 谷へ下る。連の男これ 村の熊という男、 手分し I) 矢でである 友人とと を救わ んあま てその か l)

几 を焼きて生計とする者、 几 六 角 牛 の峯続きにて、 これも笛の上手にて、 橋野という村の上なる山に 金 坑 ある日昼の間小屋におり、 あり。 この鉱 仰<sup>あ</sup>おむき Ш のた に寝る 8

四

仙人 峠せんにんとうげ

立<sup>ち</sup>なり。 びて笛を吹きてありしに、 恐ろしくて起き直りたれば、 小屋の口なる おもむろに彼方へ走り行きぬ。 垂 菰 をかかぐる者あり。 驚きて見れば猿の経 ふった

上閉 伊郡栗橋村大字橋野。

に塗り砂をその上につけておる故、 猿 の 経立はよく人に似て、ふったち 毛皮は鎧のごとく鉄砲の弾も通らず。

けがわょろい

たまとお 女色を好み里の婦人を盗み去ること多し。 松 まっゃ に

四六 笛を吹きやめたれば、 六角牛山に鹿を撃ちに行き、 いしか、 栃 内村の 地竹を手にて分けながら、 林やしざき やがて反れて谷の方へ走り行きたり。 に住む何某という男、 オキを吹きたりしに、 大なる口をあけ嶺の方より下り来たれり。 今は五十に近し。 猿の経立あり、 十年あまり前のことなり。 これを真の鹿なりと思 胆 き 造っ ぶ れて

オキとは鹿笛のことなり。

四七 この この地方にて子供をおどす言葉に、 Щ には猿多し。 緒挊の滝を見に行けば、崖の樹の梢にあまたおり、ぉがせ たき 六角牛の猿の経立が来るぞということ常の事な 人を見れば遁に

げながら木の実などを擲ちて行くなり。 にもあまた猿おりて行人に戯れ石を打ちつけなどす。

四九 仙人峠は登り十五里降り十五里あり。 その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。こ

えり。 の堂の壁には旅人がこの山中にて遭いたる不思議の出来事を書き識すこと昔よりの習なり。かべ 例えば、 こちらを見てにこと笑いたりという類なり。 我は越後の者なるが、 何月何日の夜、この 山やまみち またこの所にて猿に悪戯いたずら にて若き女の髪を垂れたるに をせられた · 逢

○この一里も小道なり。

りとか、三人の盗賊に逢えりというようなる事をも記せり。

れて 浜の 五. 実のように吹きて遊ぶなり。 五. 〇 りたり。 昔ある長者の娘あり。 にこの鳥になりたりという。 女や子どもこれを採りに山へ行く。酢の中に漬けて置けば 紫 色 になる。 大 槌より 駄 賃 附おおづち だちんづけ 死助の山にカツコ花あり。 われなる 山にはさまざまの鳥住めど、最も寂しき声の鳥はオット鳥なり。 夕暮になり夜になるまで探しあるきしが、これを見つくることをえずして、つい 、 なり。 またある長者の男の子と親しみ、 の者など峠を越え来たれば、遥に谷底にてその声を聞くといえり。 「オットーン、オットーンというは夫のことなり。 この花を採ることは若き者の最も大なる遊楽なり。 遠野郷にても珍しという花なり。 山に行きて遊びしに、 五月 閑 古 鳥 夏の夜中に啼く。 男見えずな 末の方かす の啼くこ 酸 よ り き

五.

馬追鳥は

時 鳥 に似て少し大きく、ほととぎす すこ

羽の色は赤に茶を帯び、肩には馬の綱のよ

う声なり。 の奉公人、 うなる縞あり。 るきしがついにこの鳥となる。 年により馬追鳥里にきて啼くことあるは飢饉の前兆なり。 山へ馬を放しに行き、 胸のあたりにクツゴコ(口籠)のようなるかたあり。 アーホー、 家に帰らんとするに一匹不足せり。 アーホーと啼くはこの地方にて野におる 夜通 これも或る長者が家 深山 には常に住みて しこれを求めあ 馬を追

啼く声を聞くなり。

盛り おか なり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。 姉の食う分は一層旨かるべしと想いて、 れも鳥になりて庖丁かけたと啼きたりという。 妹さてはよきところをのみおのれにくれしなりけりと思い、 そのまわりの堅きところを自ら食い、 クツゴコは馬の口に嵌める網の袋なり。 辺にては時鳥はどちゃへ飛んでたと啼くという。 郭 公と 時 鳥 とは昔ありしかっこう ほととぎす 姉ねいもと 庖 丁 にてその姉を殺せしに、 中の軟かなるところを妹に与えたりしを、 ガンコは方言にて堅いところということなり。 なり。 遠野にては時鳥のことを庖丁かけと呼ぶ。 郭公は姉なるがある時芋を掘りて焼 悔恨に堪えず、やがてまたこ

たちまちに鳥と

妹は

○この芋は 5 馬 鈴 薯 のことなり。

五. 几 閉伊川の流れには淵多く恐ろしき伝説少なからず。小国川との落合に近きところに、^^レがゎ なが ふち

聞 川井という村あり。 不思議に勝ち続けて金溜 うにして遣らんといいたり。 顔を見れば、 中に取り落し 熱湯を注ぎ入れなどしたり また昔の主人に奉公して年を経たり。 とありきと語りしかば、 日同 あることを人にいうな。 タシに彼の斧は立てかけてありたり。 ゆ。 .じ淵の辺を過ぎて町へ行くとて、 これを求め この男は疾くに物忘れして、この娘のい うたり。 二三年前に身まか て行くに岩の陰に家あ 主人 その村の長者の奉公人、 やがてその噂は近郷に伝わ その礼としてはその方 の物なれば淵に入りてこれを探りしに、 I) しが、 そのためなるか否かは知らず、 ほどなく奉公をやめ家に引き込みて中ぐら りたる我が主人の娘なり。 何 の効もなかりしとのことなり。 ふと前の事を思い出し、 これを返したまわらんという時、 家の主人は何と思い り。 奥の方に美しき娘機を織 ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、 身 上 良くなり、 Ņ りぬ。 しことも心づかずしてありし しにや、 その頃より男は 斧は返すべければ我がこの所に その後 伴なえる者に以前かかることも 水 その淵 の胴 引 引 奉公をせずともすむよ の底に入るまま i) 振 7 に何荷ともなく 家産 ij いの農民にな などいう博変に 1 返りた た に に再び傾き、 に再び傾き、 ij 斧の を水 る女 に物 そ 或る 0) 6 i)

五. 五. |||には川童多く住めり。 猿ヶ石川ことに多し。 松崎村の 川かわばた の家にて、 二代まで

下閉

伊

都

 $\prod$ 

并村大字川井、

川井

はもちろん川

合の義なるべし。

五六

Ŀ

高く 事あ 端 たり。 者の もか の側に寝たりしに、 帰らんとするに、女川の汀に踞りてにこにこと笑いてあり。

ぬぎわずくま 続けて川童の子を孕みたる者あり。 も  $\prod$ I) 々通うという噂立ちたり。 しが、 ) 如に 法 に に に に に に た り 童 の家な ij な なりたれば、 みたれば果してその通りなりき。 いうには、 の子を産みしことありという。 5わず、 その形きわめて醜怪なるものなりき。 ij 郷村の何某の家にても川童らしき物の子を産みたることあり。確なる証とてはなず、たしか、たしか の豪家にて何の某という士族なり。 のちには婿と寝たる夜さえくるようになれり。 かくすること日を重ねたりしに、 その主人人にその始終 人々いかにともすべきようなかりき。 馬 う ま ふね 一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐もなく、 深夜にその娘の笑う声を聞きて、 に水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのことにて、 始めには婿が浜の方へ 駄 賃 附 に行きたる留守をのみ窺い ばちんづけ る す うかが 終を語れ 二代や三代の因縁にはあらずという者もあり。 生れし子は斬り刻みて 一 升 樽 に入れ、 その子は手に水掻 次第にその女のところへ村の何某という者 夜 村会議員をしたることもあり。 ij 女の婿の里は新張村の何某とて、 かの家の者一同ある日畠に行きて夕方に その産はきわめて難産なりしが、 さては来てありと知りながら身動き 川童なるべしという評判だんだん あり。 次の日は昼の休みにまたこの この娘の母もまたか 婿の母も行きて娘 土中に埋め これ これ 或る ŧ  $\bar{\Pi}$ 

惜しきもの れを携えて道ちがえに持ち行き、 けれど、 身内真赤にして口大きく、みうちまっか な り、 売りて見せ物にせば金になるべきにとて立ち帰 そこに置きて一間ばか まことにいやな子なりき。忌わいま りも離 れ たり りたる しければ しが、 ż 棄てんとてこ 早 取 と思 り隠され 直

○道ちがえは道の二つに別かるるところすなわ ち っ 追 分 け なり。

て見えざりきという。

馬 う ま ひ き 五七 引きずられて厩の 長さは三寸に足らず。 の翌日などはことにこの事 みて少しあけて の子は外へ遊びに行きし間に、 小鳥瀬川の姥子淵  $\prod$ 結局 0) 岸 今後 の砂の上には川童の足跡 見れ は村中の馬に 前に来たり、 ば川童の 指先 相いざわ あ の辺に、 のあとは人ののように明らかには見えずという。 ij の滝 の手出でたり。 · 悪い たずら 馬 う ま ふね 猿 新屋の家という家あ の足と同じく に覆われてありき。 をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。 川童出でてその馬を引き込まん というものを見ること決して珍しからず。 りという。 村中 ல் ・ 親やゆび 指で もの集まりて殺さんか宥さん i) o は離 家のもの馬槽 ある日淵・ れて人間 とし、 の手 へ馬を冷しに行き、 の伏せ の跡に かえりて馬に 7 か 似 あるを怪 たり。 と 雨 の日

○この話などは類型全国に充満せり。 いやしくも川童のおるという国には必ずこの話あ

の川

童今は村

を去

りて

. の 淵

に

住め

り。何の故にか。

の間 々木氏 五. 九 より、 この曾祖母、 外の地にては 真赤なる顔と なおさな .童の顔は青しというようなれど、 りしころ友だちと庭にて遊びてあ したる男の子の顔見えたり。 これは川童なりしとなり。 遠野の川童は面の色赭きなり。 りしに、 三本ば か りあ る 今もそ 3胡桃の木 0) 胡 佐

桃大木にてあり。

この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹な

I)

あり。 あま 六〇 り憎ければこれを撃たんと思い狙いたるに、 さて 和野村の嘉兵衛爺、 引金を引きたれども火移らず。 雉子小屋に入りて雉子を待ちしに狐しばしば出でて雉子を追う。きょごゃ 胸 騒 ぎして銃を検せしに、 狐は此方を向きて何ともなげなる顔して 筒 筒口より手元つつぐち てもと

嘲りをいとい、 て見るに、 し傷つけて殺すこと能わずば、必ず祟あるべしと思案せしが、きず のところまでいつ 胸騒ぎして、むなさわ これに蓬を巻きつけて打ち放したれど、 同 じ人六角牛に入りて白き鹿に逢えり。 白 鹿 は神なりという言い伝えあれば、 よく鹿の形に似たる白き石なりき。 思い切りてこれを撃つに、手応えはあれども鹿少しも動かず。 のまにかことごとく土をつめてありたり。 平 生魔除けとして危急 鹿は 数十年の間山中に暮せる者が、 の時のために用意 なお 動 かず、 名誉の猟人なれば世間のめいよ かりうど せけん したる あまり怪しければ近よ **黄**かごん 一の丸を取り 石と鹿とを 時 Ė i) i)

I) るべくもあらず、 全く 、魔 魔 に よ う の仕業なりけりと、 この時ばかりは猟を止めばやと思

思議に遭 六二 て再 みた 向に人はおらず。 て中空を飛び 魔除けのサンズ縄をおのれと木のめぐりに 三 囲まょ 入りし たきし び思い りしに、 小おぐに 妻は少しく魯鈍なりき。 また同 庭を裏の方へ廻れば、 い、 返して、 その木の梢に蔽 よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。 の三浦某というは村一の 金 持かねもち じ人、 けれ そのたびごとに鉄砲を止めんと心に誓い、 夜深く物音のするに心づけば、 かえりたり。 ど門の中に入りて見るに、 ついに玄関より上りたるに、 ある 夜ょ 年取るまで 猟 人 の業を棄つること能わずとよく人に語りたり。 さんちゅう 1 この時 か この妻ある日門の前を流るる小さき川かど。まえ 牛 か 小屋ありて牛多くおり、 りたり。 にて小屋を作るいとまなくて、 の恐ろしさも世の常ならず。 なり。 すわやと銃を打ち放せばやがてまた 大なる 大なる庭にて紅白の花一 その次の間には朱と黒との膳椀 引きめぐらし、 今より二三代前の主人、 ) 僧 形 形 さてふと見れば立派なる黒き門のもん 氏神に願掛けなどすれど、 馬舎あ の者赤き衣を羽のように羽 前後三たびま 鉄砲を竪に抱えてまどろ りて馬多くおれ とある大木の下 に沿 面に咲き鶏多く遊べ まだ家は いて蕗を採りに 羽ば で か 貧 か たきし やが る 不

ツあり。

り。 れ持 量る器となしたり。 を洗 慾にて何ものをも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべ これを食器に用いたらば汚しと人に叱られんかと思い、 取り出したり。 家はこれより幸運に向い、 家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、 マヨイガという。 ○このカドは門にはあらず。 ち出 はな この事を人に語れども実と思う者もなかりしが、 いてありしに、 ければ、 でて来べきものなり。 奥の座敷には火鉢ありて 鉄 瓶 の湯のたぎれるを見たり。 マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の内の 什 器 もしや山男の家ではな 川上より赤き椀一つ流れてきたり。 しかるにこの器にて量り始めてより、 ついに今の三浦家となれり。 その人に授けんがためにかかる家をば見するなり。 川戸にて門前を流るる川の岸に水を汲み物を洗うため家ご いかと急に恐ろしくなり、駆け出 始めて川より拾い上げし由をば語 また或る日わが家の 遠野にては山中の不思議なる家を ケセネギツの中に置きてケセネを あまり美しければ拾い上げたれど、 いつまで経ちてもケセネ尽きず。 されどもついに しといえ カド 家畜何に して家に に出 りぬ。 ij 女が 帰 てもあ で この て物 りた 無

○ケセネは米稗その他の 穀 物 をいう。 キツはその穀物を容るる箱なり。 大小種々のキ

とに設けたるところなり。

りぬ。 入り、 六 の を取 花 んと 話を聞きて実とする者もなかり 後にはだんだん恐ろしくなり、 うに見え、どこか便所などのあたりに 四 類を持 0 紅 年 i) 白 7 その婿も ここに門あ 出 前この 金沢村は白望かねさわむら しろみ ち来たり長者にならんとて、 山 に咲きたりしことなど、 たる室あり。 路 村よ に 迷 つ V りきというところに来たれども、 i) 1 に 栃 至の麓、 金持になりたりということを聞 内 またこのマ 村 座敷に 0 山 上閉伊郡 鉄っぴん 崎 引き返してついに小国 ぬる某か、なにがし すべ が ヨイガに行き当り て前 婿<sup>む</sup>こどの 山崎 人が立ちてあるようにも思わ の内にてもことに山奥にて、 の湯たぎりて、 の方にてはそはマ の話の通り かが家に娘の を先に立てて人あまたこれを求 Ŕρ 眼に っなり。 。 か の村里に出 今まさに茶を煮ん ず。 か 家の 婿を取 か るものもなく空しく帰むな ヨイガなるべ あり 同 じ りたり。 ·さま、 で く玄関 たり。 れ 人の往来する者 たり。 とするところのよ 牛 Ž に入り 崽 小 の婿実家 め 茫<sub>うぜん</sub> 然ん 雞 玉 にてはこの 行きて の Ш 少な り来た とし 0) 膳椀 奥に 膳椀 行 か

## ○上閉伊郡金沢村。

安倍貞任 きがけ 早池学 の の母住めりと言い伝う。 中 は ほどに 御 影 石 がげいし あり Ć, の山なり。 人などはとても行きうべきところにあらず。 雨の降るべき夕方など、あめふ この Щ の小 |国に向きたる側に安倍ケ城とい 岩屋の扉を鎖す音聞ゆという。 ここには

小 国 附馬 牛つくもうし 0) 人 々 は、 安倍 ゲ城 の錠の音が ?する、 明ぁ 日す は 雨 な らん など

安倍 道兵任 同 ゆ 山 か  $\mathcal{O}$ l) 附 あ 馬 る 牛 Ш ょ な V) り。 の登 V) 小 玉 П に ょ もま り登る た安倍屋敷とい Щ 口に も八幡太郎 ・う巌窟 の家まの あ l) への討死 死 とにかく 早池峯 た る は

埋め

た

V)

う

塚

三つ

ば

か

l)

あ

IJ.

址とも言いに 境に いうところあり。 安倍貞 山 、伝う。  $\Box$ より 任に 景色よきところに は二三 関する伝説は 沼 里も登りたる あ りて貞任が この ほ て東海岸よく見ゆ。 馬を冷せしところなりとい Щ か 中に、 に も多し。 広く平なる 土淵村と昔は橋野はしの る原 あ i) . う。 そ 貞任が とい 0) あ たりの 1 が陣屋を構えし 栗 地名 橋 村と 貞 0)

遠野 ては た 0 0) 町 周 土 つの の址 も 等 囲 淵 の路には あ Ò に 村 あり。 が 館 た て あ と 物持も は には安倍氏という家あ 堀 ちにて、 あ 厨りやがわ あり。 また八幡 八幡沢 りて水を通ず。 貞任が陣屋なりという。 村会議 しゃく の 館っ 柵に近き家な Ш とい という。 員なり。 う山 刀剣 りて貞任が あ 馬具あ 八幡 りて、 り。 安倍 太郎 土 またあ 末なりとい の子孫はこのほ 淵 そ の が 二つの館の間 村 ij 山 陣屋とい 0) 安倍家 0) . う。 当主は 、幡沢 うも 0 か 昔は栄えたる家 にも 0 匹 安倍 二十余町を隔 館 のこれ Ŧi. 15年末年 多し。 町北、 の方 なり。 に向 小鳥瀬川 門ん 盛 な か ij え 瀬川の河の安倍館の安倍館で んる峯に れ ょ l)

う部 これは煮た粥かとい をしたりという言 八幡太郎ここを通りしに、 落 あ 戦 の当時このあたりは蘆 い伝えありて、 いしより村の名となる。 敵味方いずれの

てきみかた 矢の根を多く掘り出せしことあり。 しげりて土固まらず、 の兵 糧 似田貝の にや、 村の外を流るる 粥を多く置きてあるをかゆ ユキユキと動 この間に似田貝とい 小川 た。鳴川 のなるかわ 揺 せ とい 見 或る 時

これを隔てて足洗川村 ニタカイはア 玉 Þ にてはニタともヌタともいう皆これなり。 イヌ語 のニタトすなわち湿地より出しなるべ 鳴川にて義家 が足を洗い 下閉伊郡小川村にも二田貝という字あ しより村の名とな 地形よく合えり。 るという。 西 0)

あり。

き百姓 六九 ば厩舎に行きて寝ね、 に娘には知らせず、 せてもらいたり。 長じ この 1)。 あ 今の土淵村には 大 同 という家二軒あり。 たり。 ij 人 の養母名はおひで、八十を超えて今も達者なり。 妻はなくて美しき娘あり。 まじないにて蛇を殺し、木に止れる鳥を落しなどするを佐 昨年 馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。 0 ついに馬と夫婦になれ 旧 暦正月十五日に、 また一匹の馬を養う。 この老女の語りしには、 ij 山口の大同は当主を大洞万之丞 或る夜父はこの事を知りて、 佐々木氏 娘この馬を愛して夜になれ その夜娘は馬のおらぬ の祖 昔あるところに貧し 一个木 母 の姉 そ 君はよく見 0) な 次 0) 日 魔

*1*)。 の大同 はその首に乗りたるまま天に昇り去れり。 泣きいたり 馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像を作る。 より父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、 妹神 佐々木氏 この像は今附馬牛村にありといえり。 にあり。 の伯母が縁づきたる家なるが、 これを姉神とす。 父はこれを悪みて斧をもって後より馬の首を切り落った。 中にて作りしは山崎の オシラサマというはこの時より成 今は家絶えて神の行方を知らず。末にて作り その像三つありき。 在家権十郎という人の家にざいけごんじゅうろう 死したる馬の首に縋りて 本にて作り せし (i) りし た たちまち る 神な は Ш り。 娘 あ П

けれ るは からず。 されどオシラサマはなくてオクナイサマのみある家もあり。 どオクナイサマのみはいませりという。 同 じ人の話に、 なり。 П の大同にあるオクナイサマは木像なり。 田 たん ぼ オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴ないて在す神なり。 のうちにいませるはまた木像なり。 山口の 辻 石 たにえという人 飯豊の大同にもオシラサマはないいで また家によりて神の像 の家な も 同

の作法につきては親にも子にもいささかたりとも知らしめず。 邪宗らしき信仰あり。 この話をしたる老女は熱心なる念仏者なれど、 信者に道を伝うることはあれども、互いに厳重なる秘密を守り、 世の常の念仏者とは様かわり、 また寺とも僧とも少しも関 種

係は る室にて祈祷 人などは なくて、 同 じ 在ざいけ す。 仲 蕳 な の者 魔法まじな り。 0) 阿弥陀仏の斎 日のみの集まりなり。 いを善くする故 ) 斎 い に ち には、 その人の数も多からず。 郷党に 夜 中 人 対し の静まるを待 て \_ 種 辷ね 石し 0 権 ちて会合し、 威 あ たにえとい V) 隠

像ぞう あ な と かみ 制止する者あ きずりなどする故に、 クラサマという。 なり。 ij 栃 と ちない およそ人の大きさにて、 これ いれば、 村の字 より 村の子供これを ·琴畑 かえりて祟を受け病むことありといえり。 栃 内の 今は鼻も口も見えぬようになれり。 は深 民居まで二 Ш ・玩物物 以前は堂の中に の沢にあ 一里を隔<sup>へだ</sup> ij に う。 家の あ 琴畑 数は ij 引き出して川 しが、 0) 五軒ば 入口に 或る い 今は雨ざら 塚あ は子供を叱り戒めてこれを か り、 へ投げ入れ ij 小鳥瀬 塚 な の また路 り。 上 ΪΪ に 0) 支流 は れ 木 Ŀ を を力 0) 0) 座ざ 水み

笠郡 神 体 新 大 仏 池 像 風 土 村 子供と遊ぶを好みこれを制 記 東光寺 0 薬師 または信濃筑 仏 \_ 掛 ΪΪ 摩郡射手の 志 止するを怒りたもうことほかにも例 弥陀堂の木仏 駿河安倍郡豊田 村 『信濃奇 曲 金 0) "勝録』 軍 陣 多 坊 社 遠江 0) 神 小

大 おおほら というところにもありしことを記憶する者あり。 カクラサマ 0) 木像は遠野郷のうちに数多あり。 栃内 カクラサマは人のこれを信仰する |の字 , 西にしない にも あ 山  $\Box$ 分の

れな

者な 粗末なる彫刻にて、 衣裳頭 いしょうかしら の飾のありさまも不分明なり。

七四 所の名なりしが、 ということだけは分かるなり。 カクラサマも木の半身像にてなたの 荒 削 りの 無 恰 好 なるものなり。 栃 内 0 カクラサマは右の大小二つなり。 その地に常います神をかく唱うることとなれり。 カクラサマとは以前は神々の旅をして休息したもうべき場 土淵一 村にては三つか四 されど人の顔な つあり。 いずれの i)

ことありき。この者どもが後に言うを聞けば、女がきて何処へか連れだすなり。 あることしばしばなり。 けたる者ありしが、 ついに工場を大字山口に移したり。 口に夜になれば女の伺い寄りて人を見てげたげたと笑う者ありて、 二日も三日も物を覚えずといえり。 離なれもり の長者屋敷にはこの数年前まで燐寸の軸木の工場ありたり。 夕方になると人夫の者いずれへか迷い行き、 かかる人夫四五人もありてその後も絶えず 何 方 へか出でて行く その後また同じ山中に 枕 木 伐出しのために小屋をかまくらぎきりだ 帰りてのち茫然 淋しさに堪えざる故 その小屋の戸 帰 りての として

下に黄金を埋めてありとて、今もそのうつぎの有処を求めあるく者 稀 々 にあり。 まれまれ の家 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址なりとて、そのあたりにも 糠 森 という山 あと の糠を捨てたるがなれるなりという。この山中には五つ葉のうつ木ありて、 この長 その あ

これより

山続きにて遠からず。

者は昔の金山師なりしならんか、 このあたりには鉄を吹きたる滓あり。 恩徳の金山 も

諸 国 のヌカ塚 スクモ塚には多くはこれと同じき長者伝説を伴なえり。 また黄金埋蔵 0)

通り る夜なればその光にて見るに、膝を立て口を開きてあり。この人大胆者にて足にて揺かし 枕にして 仰 臥 したる男あり。 りという人はなか 家に帰りたり。 て見たれど少しも身じろぎせず。道を妨げて外にせん方もなければ、 十あまりのころ、 んなり。 たる 伝説 Щ のみなりし故、  $\Box$ も諸国に この人 の田尻長三郎というは土淵村一番の物持なり。
- たじり 次の朝行きて見ればもちろんその跡 方もなく、 りしかど、その枕にしてありし石の形と在りどころとは昨夜の見覚えのみおぼ の曰く、 おひで老人の息子亡くなりて葬式の夜、 限りなく多くあり。 さらに何もののわざとも思いつかずと。 手をかけて見たらばよかりしに、半ば恐ろしければただ足にて よく見れば見も知らぬ人にて死してあるようなり。 人々念仏を終りお 当主なる老人の話に、この人四 また誰も外にこれを見た ついにこれを跨ぎて 軒の 雨落ちの一 のお の帰 月の 石 り行 あ

同じ人の話に、

家に奉公せし山口の長蔵なる者、

今も七十余の老翁にて生存す。

か

刻に 長蔵 めて恐ろしくなり、少し引き下らんとして上を見れば、今の男玄関の 雲 壁 にひたとつき り明きたるところより、すっと内に入りたり。 なりて家の内に飛び込み、 戸の隙に手を差し入れて中を探らんとせしに、 るなと腹立たしくなりて、 と近よりしに、 かしこには垣根ありしはずなるにと思いて、よく見れば垣根は正まさい。 この門の前に つて夜遊びに出でて遅くかえり来たりしに、 に新張村に 名をおつねといえり。 に立てる人影あり。 りき。 も怪しみてこれを見たるに、 この長蔵の父をもまた長蔵という。 若きころ夜遊びに出で、まだ宵のうちに帰り来たり、門の口より入りしに、ょい の何某という者、 て浜の方よりくる人に逢えり。 奥の方へは遁げずして、かえって右手の玄関の方へ寄る故、人を馬鹿に 懐手をして筒袖 おつねのところへ来たるヨバヒトではないかと思い、つか 主人にこの事を語りしが、 なお進みたるに、 浜よりの帰り途に馬より落ちて死したりとのことな 往還を隔てて向側なる畠地の方へすっと反れて行きたり。 代々田尻家の奉公人にて、 懐手のまま後ずさりして玄関の戸の三寸ば 雪 合 羽 ・ 主人の家の門は大槌往還に向いて立てるが、 中の障子は正しく閉してあり。 されど長蔵はなお不思議とも思わず、 の袖口を垂れ、 のちになりて聞けば、 を着たり。 顔は茫としてよく見えず。 近づきて立ちとまる故 しくあり。 その妻とともに仕え これと同じ 急に怖ろしく その つか かか す

前兆にてもあらざりき。

も、 て我を見下すごとく、その首は低く垂れてわが頭に触るるばかりにて、 抜け出でてあるように思われたりという。 この時はただ恐ろしかりしの その眼 みにて何 の球は尺余 事 0

- ヨバ ヒトは呼ばい人なるべし。 女に思いを運ぶ人をかくいう。
- ○雲壁はなげし 0) 外 側 の壁なり。
- の家の建てかたはいずれもこれと大同小異なり。 右の話をよく呑みこむためには、 田尻氏の家のさまを図にする必要あり。 遠野 郷

通例は東向きなり。

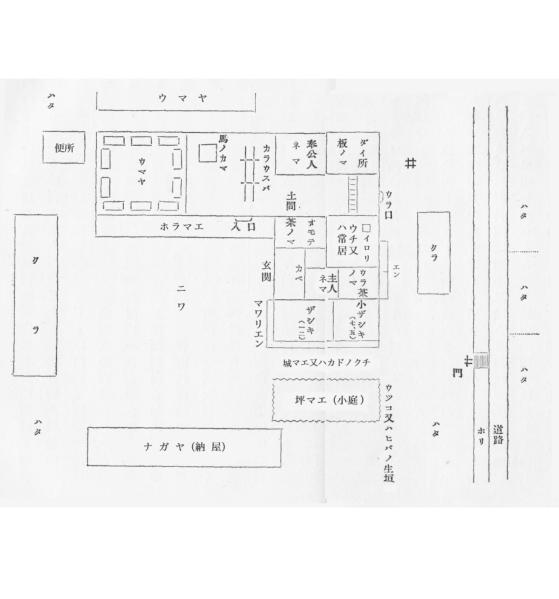
なり。 とウチとの間に小さく暗き室あり。 門はこの家のは北向きなれど、 門のことを ) 城 前 じょうまえ という。 屋敷のめぐりは畠にて、ゃぃき これを座頭部屋という。 右の図にて厩舎のあるあたりにある 昔は家に宴会あれば必ず座頭 囲<sub>しよう</sub> を設けず。 主人 の寝室

を喚びたり。 これを待たせ置く部屋なり。

○この地方を旅行して最も心とまるは家の形の何れもかぎの手なることなり。 この家な

どそのよき例なり。

人も死ぬる二三年前に夜遊びに出でて帰りしに、門の口より廻り縁に沿いてその角まで来かど、くち、まわぇん 栃内の字野崎に前川万吉という人あり。二三年前に三十余にて亡くなりたり。



たるとき、 たる男あ 六月の月夜のことなり、 田尻 色の蒼ざめたる顔なりき。 氏の息子丸吉この人と懇親にてこれを聞きたり。 何 なにごころ 大いに驚きて病みたりしがこれも何 なく雲壁を見れば、 ひたとこれにつきて寝 の前兆にても

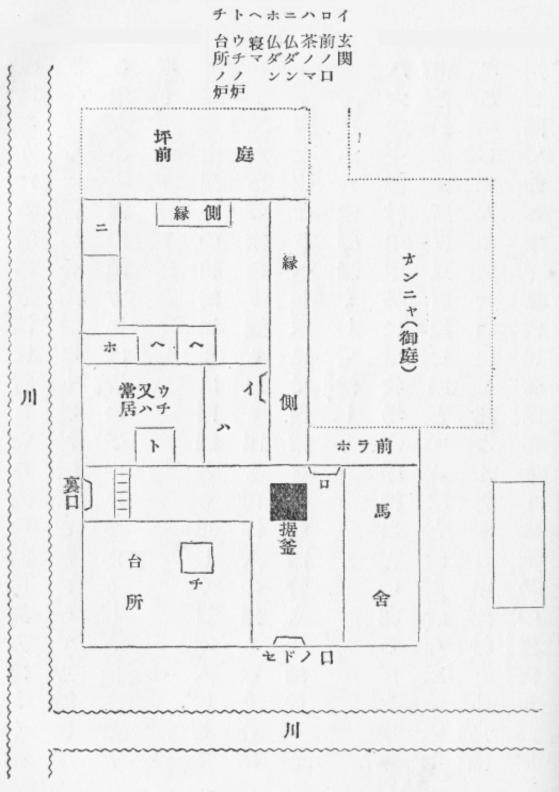
次のペ ど、 れば祟ありとて開かざる古文書の葛籠 この人は近代的の人にて怜悧なる人 常 居 に帰りて人々に話し、 上に影 て便所に行かんとして茶の間に入りしに、 八二 これは 衣類 板戸にがたと突き当り、 山 のように重なりて人の形あり。 ジに出す。 П の縞も眼鼻もよく見え、 0) 大同 田尻丸吉という人が自ら遭いたることなり。 玄関は巽の方に向 大洞万之丞 行 灯を持ち行きて見たれば、 戸のさんにも触りたり。 髪をば垂れたり。 ハなり。 の家の建てざまは少しく外の家とはか その顔のところへ手を遣ればまた手 かえり。 つあ 座敷との境に人立てり。 また虚言をなす人にもあらず。 きわめて古き家なり。 恐ろしけれどそこへ手を延ばして されどわが手は見えずして、 少年の頃 すでに何も 幽かに茫としてはかす ある夜常居 この家には出 のもあらざりき。 わ の上に顔 れ i) より立 覚ゆ。 そ して見 その Ō 探 あ 図 V) ħ

ろといえば、 四 佐 々木氏 嘉永の頃なるべきか。 0 祖父は七十ばかりにて三四年前に亡くなりし人なり。 海岸の地には西洋人あまた来住してありき。 この人の青年のこ

	茶ノ間	
神棚力仏壇一座シキ	常居又ハウチ 横座 キンスリ座 客座	台ドコロ
	障子	
	縁 雨戶 側	

に行 には合の子なかなか多かりしということなり。 はよく抱き合いては嘗め合う者なりなどいうことを、 も ĺЪ わ 田にも 遠野郷にてもこれを奉じて磔になりたる者あり。 西洋館あり。 船 なこし 越 の半島の突端にも西洋人の住みしことあり。耶蘇教は 今でも話にする老人あり。 浜に行きたる人の話に、 海岸 地 力 異 密

の村と小鳥瀬川を隔てたる字 下 栃 内 に普請ありて、こがらせ き今日のことを語 にと少し不思議に思い 仕事をなし、 方に政の父ひとり来たりて人々に 挨 拶 し、 を業とする政という者、今三十六七なるべし。この人の父大病にて死なんとするころ、こ 八六 の人とは同じからず、 も眼も西洋人の通りなり。 人の名は忘れたれど、 土 土 - 淵村の |淵村の中央にて役場小学校などのあるところを字 本 宿 やや暗くなりて皆とともに帰りたり。 柏りわざき りしが、 しが、 声細くして鋭し。 にては両親とも正しく日本人にして白子二人ある家あり。 その時刻はあたかも病人が息を引き取らんとするころな 今は二十六七ぐらいなるべし。 遠野の町の豪家にて、主人 大 煩 おおわずら 後に聞けばその日亡くなりたりとのことなり。 おれも堂突をなすべしとて暫時仲間に入りて あとにて人々あの人は大病 地固めの堂突をなすところへ、夕どうづき 家にて農業を営む。 いして命の境に臨みしこ という。 此所に豆腐屋とうふや 人々 のはずなる 語音も土 悔 髪も みに行 地 肌



間話 ま をし る 百 ふ T やが と菩提寺に訪 て帰 らんとする様 1 来 たれ ij 子 に 少 和 お しょ う セ 不 審 鄭 ていちょう 重う あ れ ば に あ 跡 より しらい茶などすす 小 僧 を見 せ に 遣や Ó た V)

時は まだ 門を出 外 ほ 出 か で などすべき様態 て家の方に も あ i) 誰 向 にも (\ にてはあらざり よく挨拶 町 ?の角を廻; して常る りて見えずな この体なりなってい Ĺ な ij しが、 れ 後 に 1)。 寺 この その道 にては茶は 晚 に にてこの 死 飲 去し みたりや否やと茶 人 てもちろん に 逢 た そ る Ō 人

を進 う老 寺の 問うに、 椀を置きしところを改めし 人に 8 葉を掛け合 触ぶれがしら ばら <u>一</u> 三 あえり。 れ ŧ 日気分も宜 な 似たる ŋ̈́ 話をし 1 7 この老人 別れ 話 或 て帰 る な たり。 ij 日 L ゖ は に、 る。 0) n 土淵 か 夕方に 畳の敷合わ これ ば、 常堅寺にても ね 7 村 大病 大字土 今日 村 も 小 人何某という者、 は を 僧に見させたる 寺 淵 せへ皆こぼ して居る者な 和 0) へ話を聞きに行くな 常堅寺に 尚 はこの老人が訪 U いれば、 は に門の外にて見えずな てありた 本 とじゅく そうとうし 曹 洞 V ね より V) りとて、 つ 宗う  $\tilde{\phi}$ 来 まに たり にて、 来 る 路に 寺 よくな 故え 遠野 0) 失う 門 V) 出 7 迎え、 i) 前 何 郷 |某と 十二ヶ に 7 ま

八九

Щ

П ょ

l)

柏

崎

へ行く

には

| 愛 岩 山

の裾を廻るなっている。

な

ŋ̈́

に続ける松林

に

柏

崎

 $\mathcal{O}$ 

人家見ゆる辺よ

り雑木の林となる。

愛宕

山

の頂には小さき祠ありて、いただき

参え 

おおけい

の路は

林

0

中

驚きて

和

尚

語

り、

よく見ればまた茶は

畳

の間にこぼ

そ

あり、 田 た 風 ぼ

老人はその

日

せ

岩山 にあ なりと知りて後をも見ずに柏崎 るところなり。 に驚きて此方を見たる顔は非常に赤く、 を目がけて歩み寄 たる堂あり。 .の上より降り来る丈高き人あり。 登<sup>の</sup>ぼりくち 和わ野の 堂 に鳥居立ち、二三十本の杉の古木あり。 りしに、 の前には の何某という若者、 道の角にてはたと行き逢い 山神の字を刻みたる石塔を立つ。 の村に走りつきたり。 誰ならんと思い林の樹木越 眼は耀きてか 柏 崎 に 用事ありて夕方堂のあ ぬ つい その旁にはまた一つのがらんと かにも驚きたる顔なり。 先方は思い掛けざりし 昔よ り 山 しにその たりを通 の神出づと言 人の顔 I) に 0 や大い ところ 山 1 伝う 0) 神 愛

遠野郷には山神塔多く立てり、 そのところはかつて山神に逢いまたは山神の祟を受け

たる

場所にて神をなだむるために建てたる石な

i) o

九十 思わず立ち上りてお前はどこから来たかと問うに、 てやらんと思い、 る男なれば、 働きていたりしに、 めて大なる男の顔は真赤なるが出で来たれり。 松崎 村に 天 狗 森 という山あり。 この 見馴れぬ大男が立ちはだかりて上より見下すようなるを 面 悪みな 力 自 慢 のまま飛びかかり手を掛けたりと思うや否や、 頻に睡くなりたれば、 その麓なる しばらく畠の畔に腰掛けて居眠いるち 何の答えもせざれば、 若者は気軽にて平生相撲などの好きなへいぜすもう にて村の若者何某という者、 かえりて自分の りせんとせしに、 一つ突き飛ば く思い

ねた 方が きて萩を苅りに行き、さて帰らんとするころになりてこの男のみ姿見えず。 てのち人にこの事を話 三十年前のことにて、この時 れば、 :飛ばされて気を失いたり。 深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死していたりという。 したり。 の事をよく知れる老人今も存在せり。 夕方に正気づきてみれば無論その大男はおらず。 その秋のことなり。 り。 早池峯の腰へ村人大勢とともに馬を曳 天狗森には天狗多くい 同驚きて尋 家に帰 今より二

岩の陰に赭き顔の男と女とが立ちて何がげあか 知れ 九一 練の名人にて、藁と槌とを持ちて水の中に入り、草鞋を作りて出てくるという評判の人練の名人にて、ホヤら っち くを見て、 人綽名して 鳥 御 前 という。 るということは昔より人の知るところな しき岩のある ij さて遠野 遠野 年取りてのち 茸 採 あたかも 手を拡げて押し戻すようなる手つきをなし制止したれども、 の町に山 所の の町と猿ヶ石川を隔つる 秋の空の日影、 少し上の山に入り、 セ の事に明るき人あり。 りにとて一人の連とともに出でたり。この連の男というは水りにとて一人の連とともに出でたり。この連の男というは水 早池峯、 西 (J) 六角牛の木や石や、すべてその形状と 在 処 ありどころ .か話をして居るに出逢 Щ 両人別れ別れになり、 向山という山より、むけえやま . の 端は より四五間ばか もとは南部 だんしゃく 寛 鳥御前一 りなる時刻なり。ふと大なる たり。 綾がおり 家の 村の たかじょう 彼らは鳥 人はまた少し山を登 それにも構わず行 なり。 御前 とて珍 の近づ とを 町の

ば、 がら、 きたるに女は男の胸に縋るようにしたり。事のさまより真の人間にてはあるまじと思いな りたり。 のために うにしたれば、 まり不審するほどに、行き過ぐると思うまもなく、 を掛けたるに、 て小さき包を負いたり。 に逢えり。 近くなりたれば、 死したるなりといえり。 相談せしに、 連な 鳥御前は今日の一部始終を話し、 昨年のことなり。 鳥 死ぬ る男はこれを探しまわりて谷底に気絶してあるを見つけ、 |御前はひょうきんな人なれば戯れて遣らんとて腰なる切刃を抜き、 家の者あまりにその死にようの不思議なればとて、 色は黒く眼はきらきらとして、肩には麻かと思わるる古き 浅 葱 色 の風呂敷にまなさ その答えには、 かも知れず、 小国さ行くと答う。 その色赭き男は足を挙げて蹴りたるかと思いしが、 急ぎて山を下り麓近くなるころ、丈の高き男の下より急ぎ足に昇りくる。

\*\*\*\* 「恐ろしかりしかども子供の中の一人、どこへ行くかと此方より声 この人は伊能先生なども 知 合 なりき。 土淵村の里の子十四五人にて早池峯に遊びに行き、は ほかの者には誰にもいうなと語り、三日ほどの間病みて身まか 山の神たちの遊べるところを邪魔したる故、その祟をうけて この路は小国へ越ゆべき方角にはあらざれば、 かかる事は今までに更になきことなり。 はや見えずなりたり。 山 臥 のケンコウ院というにゃまぶし 今より十余年前の事なり。 介抱して家に帰 たちまちに前後 山男よと口々に 打ちか からず夕方 お 0) りたれ か れはこ を知ら るよ

言いてみなみな遁げ帰りたりといえり。

これ は 和 野 の人菊池菊蔵という者、 妻は笛吹峠のあなたなる橋野より来たる者なり。

思いたりしが、 りて見れば、 はこの岨 ことに遠野分より栗橋 吹峠を越えて妻を連れに親里へ行きたり。 この妻親 お前 に隠れてあたりやや薄暗くなりたるころ、 里へ行きたる間に、 の子はもう死んで居るぞという。 崖の上より下を覗くものあり。 はやその姿は見えず。 分へ下らんとするあたりは、 糸蔵という五六歳の男の児病気になりたれば、 急ぎ夜の中に妻を伴ないて帰りたれば、 名に負う六角牛の峯続きなれば この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはっと 顔は赭く眼の光り 後の方より菊蔵と呼ぶ 路はウドになりて両 かがやけること前 『方は岨. 者あ 山路は 昼過ぎより笛 果して子は る な ij に 樹 の話 振 のご I) 日影 返

ウドとは 両 側高く切込みたる路のことなり。 東海道の諸国にてウタウ坂・ 謡坂などい

うはすべてかくのごとき小さき切通しのことならん。

死し

こてあ

うりき。

四五年前

のことなり。

*1*)。 九四 ධ そこは林の中なれど少しく 芝原 しばはら の麓 の菊蔵、 の 林を過ぎしに、 柏崎なる姉 象 ぞ うつぼ の家に用ありて行き、 の藤七という 大酒 呑 あるところなり。 振舞われたる残りの餅を懐に入れふるま 藤七はにこにことしてその芝原を にて彼と仲善 の友に行き逢え

撲を取りしこと露顕したり。 この藤七いかにも弱く軽く自由に抱えては投げらるる故、 われたり。 正月の休みに人々酒を飲み狐の話をせしとき、 おれは相撲など取るものか、 づきたるにか 藤七が曰く、 外聞を恥じて人にもいわざりしが、四五日ののち酒屋にて藤七に逢いその話をせしに、 ここで相撲を取らぬかという。菊蔵これを諾し、二人草原にてしばらく遊びしが、すもう 今日はとてもかなわず、 の餅見えず。 相撲場に戻りて探したれどなし。 されど菊蔵はなお他の人々には包み隠してありしが、 その日は浜へ行きてありしものをと言いて、 さあ行くべしとて別れたり。 おれもじつはとこの話を白状し、 面白きままに三番まで取 始めて狐ならんかと思い 四五間も行きての いよいよ狐と相 大いに笑 昨年 りたり。 たれ ち心 ல்

象坪は地名にしてかつ藤七の名字なり。 にてこれを研究したり。 象坪という地名のこと 『石 神 問 答』の中

見つけたり。 日少し気分重ければ家を出でて山に遊びしに、今までついに見たることなき美しき大岩を わが庭に移し植え、形の面白き岩などは重きを厭わず家に担い帰るを常とせり。 松崎 の菊池某という今年四十三四の男、庭作りの 上 手 にて、じょうず 平 生の道楽なればこれを持ち帰らんと思い、持ち上げんとせしが非常に重^いぜい 山に入り草花を掘り 或る

昇り行き、 内へ と叫ぶことあり。 く心地したり。 ぐことなり。 男の癖は路上 きたる時は、 にいろいろの花咲き、 これを立て少しくもたれかかるようにしたるに、 で取り上げ、 石は今も同じところにあり。 持ち込みては り、 あたかも人の立ちたる形して丈もやがて人ほどあり。 我慢して十間ばか 遠野 石などを拾い上げてこれをあたりの人家に打ちつけ、 0 ついには昇り切りたるか、 にこにことしておりおりこれを嗅ぐなり。 やは にて木の切れ塵などを拾い、 町に芳公馬鹿とて三十五六なる男、ょりこうばか 人の家に行きては柱などをこすりてその手を嗅ぎ、 雲より上になりたるように思いしがじつに明るく清きところにて、 り以前のごとく不思議の石にもたれたるままにてありき。 かくすればその晩か次の日か物を投げつけられたる家火を発せざること ( ) かなることあらんも測りがたしと、 7り歩 しかも何処ともなく大勢の人声聞えたり。 みしが、 おりおりはこれを見て再びほ 気の遠くなるくらい重ければ怪しみをなし、 何事も覚えぬようになりたり。 これを捻りてつくづくと見つめまたはこれを嗅か そのまま石とともにすっと空中に昇り 白痴にて一昨年まで生きてありき。 この男往来をあるきながら急に立 恐ろしくなりて遁げ帰 されどほしさのあまりこれを負 しくなることありとい けたたましく火事だ火事だ 何 されど石はなおますます ものにても眼 そ の後時過ぎて心づ の i) 路の旁に ・えり 石を家の の先きま あ た Ō l)

なし。 同じこと幾度となくあれば、 のちにはその家々も注意して予防をなすといえども、

、 まっつうよう しょうから ついに火事を免れたる家は一軒もなしといえり。 まぬか

騒しくわが名を喚ぶ者ありて、うるさきこと限りなけれど、よんどころなければ心も重く ば昇ること始めのごとし。何とも言われず快し。 九七 て喚び生かしたるなり。 いやいやながら引き返したりと思えば正気づきたり。親族の者寄り集い水など打ちそそぎ 持よし。 らんと訝りつつ門を入れば、紅の芥子の花咲き満ち、いぶか、いぶか ながらなお行くに、以前失いたる男の子おりて、トッチャお前もきたかという。 中に飛び上り、 田圃に出でて菩提寺なるキセイ院へ急ぎ行かんとす。 いたのかと言いつつ近よらんとすれば、今きてはいけないという。 飯豊の菊池松之丞という人いいで まつのじょう この花の間に亡くなりし父立てり。 およそ人の頭ほどのところを次第に 前 下 りに行き、また少し力を入る 傷寒を病み、 お前もきたのかという。 寺の門に近づくに人群集せり。 見渡すかぎりも知らず。 足に少し力を入れたるに、 たびたび息を引きつめし時、 これに何か返事をし この時門の辺にて ٧١ お前はこ 何 故 な よいよ心 図らず空 自分は ñ

九八 早池峯山 路 の傍に山 ・六角牛山の名を刻したる石は、 一の神、 田の神、塞の神の名を彫りたる石を立つるは常のことなり。 遠野郷にもあれど、 それよりも浜にことに多し。

足 あし もと に死 思わ が、 を呼 とい 九 廻り見えずなりたり。 出 の色を変えて泣きたり。 はこの人と夫婦になりてありというに、 子とともに元もと 田 で 0) 九 ずそ せ び しが、 浜 そ を見てあり 0) に立ちて考え、 し者な たるに、 土 へ婿に行きたるが、 船越 淵 Ō 霧 学 遠く 者に 村 跡をつけて、 0) ij の漁夫何某。 中 0) 0 振 離 屋 て著作多く、 助役北川清という人の家は字火石にあり。 ょ 自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通 り返りてにこと笑いた り男女二人の者の近よるを見れば、 敷 れたるところにあ 間 0) 朝に に、 地に 追 V 死 遥なばる 先 年 なりて帰 男女は再び足早にそこを立ち退きて、 したる人と物いうとは思わ 小屋を掛 ある日仲間 かけて見たりしがふと死したる者なりし 々と船越 村 Ò のために尽したる人なり。 大海嘯 りて行く道も浪の打 りたり。 けて一 の者とともに吉利吉里より帰るとて、 子供は ij 村の方へ行く崎の洞あるところま 年ば に遭 そ 男は の後久しく煩い 可愛くはないかわい か 1 りあ とみればこれ て妻と子とを失い、 りりき。 女は正さ ħ ずし つ渚ない 代々の山 臥 清 て、 夏の初 の弟 わ のかといえば、 ij く亡くな たりといえ せ も 小消 悲し たり に福 同じ里 霧 8 と心づき、 の 布 と聞 く情なくな 0) 生き残りたる 二という人は へ行く道 0) I) 月 にて祖 者に で追 きた 夜に き 女は 夜深く四十八 し男な わ の が 便所 父は 夜 7 1 る 山まかげ 行き、 崩 少し 夜 りたれ 海 妻 け り。 な 二人 海 正 嘯 な 起き 福院 Š i) 岸 0) ば 顔 難 名  $\mathcal{O}$ で 0)

やに 坂 山を行くにこの獣の身を傭うことありと見ゆ。 山にて殺したりし女は連の者が見ておる中についに一匹の狐となりたりといえり。 るると思い せて家に帰 しばらくの間は正体を現わさざれば流石に心に懸り、後の事を連の者に頼み、 のあたりを通りしに、 れば わに か か 夢に途中まで見に出でたるに、 魚 切 庖 丁を持ちて後の方より差し通したれば、ぅぉきりぼうちょう る夜中にひとりこの辺に来べき道理なければ、 うし て目覚めたりという。さてはと合点して再び以前の場所へ引き返してみがてん 妻は事もなく家に待ちてあり。 小川のあるところにて一人の女に逢う。 山路にて何とも知れぬ者に脅かされて、 今恐ろしき夢を見たり。 必っじょう 悲しき声を立てて 化ばけもの 物の 見ればわが妻なり。 ならん あま 死 お と思い定め、 i) 0) 命を取ら たり。 夢 れ 帰 れ の野 りの され は 馳

め静かにあたりを見廻すに、流し元の水口の穴より狐のごとき物あり、 奥の方に寝させたるが、 千 万 なる話なれど是非もなく、 んかと思いしところなり、 入りて休息せんとせしに、 旅人豊間根村を過ぎ、 ふと見れば床の上にむくむくと起き直る。 よき時に来合せたり、 しばらくの間頼むといいて主人は人を喚びに行きたり。 夜更け疲れたれば、 囲炉裡の側にて煙草を吸いてありしに、死人は老女にているり 今夕死人あり、 知音の者の家に灯火の見ゆるを幸に、 留守の者なくていかにせ 胆 潰、 面をさし入れて頻っら れたれど心を鎮しず

に死 て見れば、 人の方を見つめていたり。 正しく狐にて首を流し元の穴に入れ 後 足 を爪立てていたり。 さてこそと身を潜め窃かに家の外に出で、 背戸の方に 有合わせたる棒
ありあ 廻  $\widetilde{i)}$ 

をもてこれを打ち殺したり。

○下閉伊郡

遭問

根村大字

-豊間

根

り。 作り、 どころをあるきて遅くなり、淋しき路を帰りしに、 の女、 戒めらるるは常のことなり。 Щ いたり。 の神出でて遊ぶと言 宵を過ぐればこの晩に限り人々決 童子をあまた引き連れてくるといえり。 まだ十二三の年のことなり。 袋を持ちて人の家に行き、 面白さのあまり夜になることあり。 小正 正月 顔はすてきに赤く眼はかがやけり。 千五 月の夜、 日の晩を または小正月ならずとも冬の満月の夜は、 い伝えてあればなり。 こ小正月、 されど雪女を見たりという者は少なし。 明の方から福の神が舞い込んだと唱えて餅を貰う習慣あ (,) という。 かなるわけにてか唯一人にて福の神に出で、 して戸の外に出づることなし。 十 五 宵のほどは子供ら福の神と称して四五ょい 袋を捨てて遁げ帰り大いに煩いたりといえり。 Щ 里の子ども冬は近辺の丘に行き、 .口の字 丸 古 立 におまさという今三十五六 日の夜に限り、 向うの方より丈の高き男来てすれちが 雪女が出るから早く帰れと 雪女が出でて遊ぶともい 小正月の夜半過ぎは 人群を

歳の稲の苅 入を急ぐなり。 に炉の火にくべて一時にこれを引き上げ、一列にして右より正月二月と数うるに、。 じ結果を得るは妙なり。 ーと音をたてて火が振うなり。 夜晴なるべき月にはいつまでも赤く、曇るべき月には直に黒くなり、 匹 小正月の晩には行事甚だ多し。月見というは六つの胡桃の実を十二に割り 一 時いっとき 翌日はこの事を語り合い、例えば八月の十五夜風とあらば、 何遍繰り返しても同じことなり。 村中いずれの家に 風ある月には 満月の ても同 フーフ その

五穀の占、 月の占多少のヴァリエテをもって諸国に行なわる。 陰陽道に出でしもの
おんようどう

ならん。

となし、 これを見るなり。 〇 五 同種の米を膳の上に平らに敷き、 また世中見というは、同じく小正月の晩に、 餅につきたる 米 粒 の多きものその年は豊作なりとして、 鏡がみもち 餅ち をその上に伏せ、鍋を被せ置きて翌朝 いろいろの米にて餅をこしらえて鏡 早中晩の種 類

さかも違うことなしといえり。 海岸の山田にては蜃気楼年々見ゆ。 路上 の車馬しげく人の往来眼ざましきばかりなり。 常に外国の景色なりという。見馴れ 年ごとに家の形などいさ ぬ都の

を択び定むるなり。

り。 〇七 河原に出でて石を拾いてありしに、 丈高く面朱のようなる人なり。 上郷村に河ぷちのうちという家あり。 娘はこの日より占の術を得たり。 見馴れ ぬ男来たり、 早瀬川の岸にあり。この家の若き娘、 木の葉とか何とか 異 人は Щ を娘に の 神 くれ ある

山の神の子になりたるなりといえり。

の占い て山 の 少しも見ずして心に浮びたることをいうなり。 る例は指を屈する ねば近き中に は木挽なり。 板 敷を取 その中にふと立ちて 常 居 の中をあちこちとあるき出すと思うほどに、その人 の神よりその術を得たりしのちは、 の法は世間 山 (J) り離 死人ありとか家が焼くるとかいうなり。 柏崎 神 ö るに勝えず。 乗り移りたりとて占をなす人は所々にあり。 の者とは全く異なり。 の孫太郎もこれなり。 土を掘りて見よ。 古き鏡または刀の折れあるべし。 何 不思議に人の心中を読むこと驚くばか 以前は発狂して喪心したりしに、 の書物をも見ず、 当らずということなし。 帰りて掘りて見るに必ずあり。 頼みにきたる人と世間 附馬牛村にもあり。 例えば それ ある を取 お前 りな 日 山 1)。 i) 話をな に入 0) 0) 出 ウチ 顔 本業 か 浴は そ か 1)

きて立つ。 〇九 盆 紙にて顔を描き瓜にて陰陽の形を作り添えなどす。虫祭の藁人形にはか のころには雨風祭とて藁にて人よりも大なる 人 形 を作り、 道の岐に送り行 かるこ

て作 酒を飲みての とはなくその形も小さし。 りたるホラなどあり。 同 笛 太 鼓 にてこれを道の辻まで送り行くなり。 雨風祭の折は一部落の中にて頭屋を択び定め、 これを高く吹く。 さてその折の歌は 「二百十日 笛の中には桐 0 里 人 集まりて 雨 風 ま の木に つるよ、

『東国 ||輿地勝覧』 によれば韓国にても ) 厲 喧 虐ん を必ず城の北方に作ること見ゆ。 ともに

どちの方さ祭る、

北の方さ祭る」という。

桝の上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして火を喰い消してありしなりと。 れを泊めて、 せしことあり。 組のゴンゲサマと、土淵村字 五 日 市 の神楽組 てあるく故、 子頭とよく似て少しく異なれり。 甚だぃがしら つが 玄武神の信仰より来たれるなるべ つと物を噛む音のするに驚きて起きてみれば、 lかつて附馬牛村に行きて日暮れ宿を取り兼ねしに、 ゴンゲサマというは、 五. これを見知らぬ者なし。 ゴンゲサマの 霊 験 はことに火伏にあり。 ポンデル しょうせい ひょせ 新張のゴンゲサマ負けて片耳 升桝を伏せてその上にゴンゲサマを座え置き、 はず 神楽舞 の神楽組 つ御利生 の組ごとに一つずつ備われる木彫 を失いたりとて今もなし。 のゴンゲサマと、 のあるものなり。 軒のきばた 端た ある貧しき者 人々は臥したりし に火の燃えつきてあ かつて途中にて争 新にいばり の八 の家にて快くこ 毎年村々 の像にして、 子どもの頭を 幡社 に、 右 を舞 りしを、 の八幡 0 夜中 をな 神 獅し

病 む者など、 よくゴンゲサマを頼み、 その病 を噛みてもらうことあ

の字土 はい をハカア ために今も山 という地 たずらに死んで了うこともならぬ故 淵 しあり。 ガリというといえり。 に、 Ш Ц 口 土 ともにダン 昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野 飯豊、 |淵辺にては朝に野らに出づるをハカダチとい 附 ノハ 馬 牛 ナという地 -の字荒!  $\prod$ 東禅寺および 火 渡、 に、 名あ ij 日 中 は その近傍にこれと相対 里 へ下り農作 へ追 青笹 V. の字 L 7 遺る て 口 夕方野らより帰ること 中 「を糊ら の習あ U 沢ならびに土淵 て必ず た I) ヶ蓮台野 ij ۼ<sub>。</sub> その 老人

めて明白なり。 隔 のも土淵 7 ○ダンノハ ナは を祭るた 相 ダン 対す。 大 お お お ほ ら 飯豊の ノ め ナは . う。 蓮台野 も *)* \ 0) あまた石器を出す。 ナは昔館の 越ゆ 塚な ほぼ 壇 此所には蝦夷屋敷という四 の塙なるべ る丘 同様 りと信ず。 0) 四方はすべて沢な にて、 のあ の上にて I) 村 蓮台野 し時代に が 館 た て あ と 境の すなわち丘の上にて塚を築きたる場 石器土器の出るところ山口に二ヶ所あり。 岡 もこの ij 口人を斬き ょ の上な i) 類な 角に凹みたるところ多くあ 東はすなわちダンノハ の続きなり。 ij るべきこと i) 仙台にもこの地 場所なるべ 蓮台野はこれ 『石神』 し ナと -問答』 名あ とい 葄 ij の間 と山 なら ij 中 他の一は小 ん。 そ に 0) 地 山 の跡きわ 低 0) 形 V П 境の 地、 民 は え 0) ダン 居 l) Ш 神 南  $\Box$ 

敷はこの両側に連なりてありしなりという。 精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料いろいろなり。 は単純なる 渦 紋 などの模様あり。 類も出づ。 字をホウリョウという。ここの土器と蓮台野の土器とは様式全然殊なり。ぁゞ ということもなく、 ささかもなく、 蓮台野には蝦夷銭とて土にて銭の形をしたる径二寸ほどの物多く出づ。 ホウリョウのは模様なども巧なり。 狭き 一 町 歩 ほどの場所なり。 字ホウリョウには丸玉・管玉 このあたりに掘れば祟ありという場所二ヶ所 埴輪もここより出づ。 星谷は底の方今は田となれり。 ホウリョウの方は も出づ。ここの また石斧石刀 後者のは技巧い 石器は 蝦夷 これに 何 . の 跡 Ø 屋

○外の村々にても二所の地形および関係これに似たりという。

ほどあり。

○星谷という地名も諸国にあり星を祭りしところなり。

○ホウリョウ権現は遠野をはじめ奥羽一円に祀らるる神なり。 蛇の神なりという。

を知らず。

これは確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。 には地震なしとて、近辺にては地震の折はジョウヅカ森へ遁げよと昔より言い伝えたり。 和野にジョウヅカ森というところあり。 象を埋めし場所なりといえり。 塚の上には石あり。 此所だけ これを掘

れば祟ありという。

詳にせり。また象坪などの象頭神とも関係あれば象の伝説は由なきにあらず、っまびらか ○ジョウズカは定塚、 祀りしところにて地獄のショウツカの奪衣婆の話などと関係あること『石神問だっえば 庄塚または塩塚などとかきて諸国にあまたあり。 これも境の 塚を森 神を

跡とて 石 垣 残れり。 りて水を引き、三重四重に堀を取り廻らせり。 その下を掘りたる者ありしが、 の墓なるべしという。 あるを見たり。 は東方に向か 乪 ということも東国 山口のダンノハナは今は共同墓地なり。 いて門口めきたるところあり。 村の老人たち大いに叱りければ、またもとのままになし置きたり。 此所に近き館の名はボンシャサの館という。いくつか 0) 山口孫左衛門の祖先ここに住めりという。 風 なり。 何ものをも発見せず。 その中ほどに大なる青石あり。 寺屋敷・砥石森などいう地名あり。 岡の頂上にうつ木を栽えめぐらしその口 のち再びこれを試みし者は大なる瓶ゥゥ 『遠野古事記』 。 の 山 かつて一たび に詳かな を掘り 。 館で の 主 ゟ

姥のことなるべし。その一つ二つを次に記すべし。 一 五 五 御伽話っ のことを 昔 々 という。ヤマハハの話最も多くあり。 ヤマハハは 山 やまう

1)。

隠れ 遁がすものかとて、 にぼ わせ、 より滑り落ちたり。 は行くべ おれはヤマ りて火にあたり、 と嚇す故に、 りすくみていたりしに、 誰がきても戸を明けるなと戒しめ、 たり。 はまた尋ね来たりて、どこに隠れたかと萱の束をのけんとして、 つか Щ ょ その間に家を遁げ出したるに、 き方もなければ、 けられてあるなり、 り滑り落ちたり。 昔々あるところにトトとガガとあり。 ハハにぼっかけられてあるなり、隠してくれよと頼み、 是非なく戸を明けたれば入りきたるはヤマ マ ハハ尋ね来たりて、どこに隠れたかと柴の束をのけんとして柴を抱えたる。 飯をたきて食わせよという。 沼の水に娘の影の映れるを見てすぐに沼の中に飛び入りたり。 その隙にまたここを遁れ出でて大きなる沼の岸に出でたり。 真昼間に戸を叩きてここを開けと呼ぶ者あり。 その隙にここを遁れてまた萱を苅る翁に逢う。 沼の岸の大木の梢に昇りいたり。 隠してくれよと頼み、 鍵を掛けて出でたり。 ヤマ ハハは飯を食い終りて娘を追い来たり、 その言葉に従い膳を支度してヤマ 娘を一人持てり。 苅り置きたる萱の中に隠れ ハハ 山の蔭にて柴を苅る翁に逢う。 娘は恐ろしければ一 、なり。 ヤマハハはどけえ行ったとて 娘を置きて町 苅り置きたる柴の中に 炉の横座に蹈みは 萱を抱えたるまま山 開かずば蹴破るぞ おれ たり。 は 人 へ行くとて、 ヤマ 炉に ハ ハ この間 お ハハ あた たか ヤ V に 1) お 食

て 焼 錐り 昔々の話 か、 た飛 たるに、 なればともどもにこれを殺して里へ帰らんとて、錐を紅く焼きて木の唐櫃 も納得してそんなら少し寝ん、 に再び此所を走り出で、一つの笹小屋のあるを見つけ、 これに鍵を下し、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハハに連れ 人くさい香がするものという。 此にも同じことを告げて石の 石はつめたし木のからうどの中にと言いて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。 び来たり娘のありかを問えども隠して知らずと答えたれば、 の終りはいずれもコレデドンドハレという語をもって結ぶなり。 の穴より注ぎ込みて、ついにそのヤマハハを殺し二人ともに親々 ヤマハハはかくとも知らず、ただ二十日鼠がきたと言えり。 ) 唐 櫃 だ り う ど それは今雀を炙って食った故なるべしと言えば、 石のからうどの中にしようか、 のありし中へ隠してもらいたるところへ、ヤマ 中に入りて見れば若き女い 木のからうどの いんね来ぬはず それより湯を煮立て の家に帰 の中に差し通し て来られ 中が Ú 家 ヤ たる りたり。 0 マ な ハ 女は ょ ハ ハ 者 ま

こ居たかと門の口より呼べば、あ、 とて戸を鎖し、 たりて娘を取 昔々これもあるところにトトとガガと、娘の嫁に行く支度を買い りて食い、 誰がきても明けるなよ、はアと答えたれば出でたり。 娘の皮を被り娘になりておる。 いたます、 早かったなしと答え、 夕方二人の親帰りて、 二 親 は買い来たり 昼のころヤマハハ に町へ出 おりこひめ で行く 来

よく知れ

り引き下して殺したり。 たきして、糠屋の隅ッ子見ろじゃ、ぬかや、すみ、こ や引き出さんとするときまた鶏啼く。その声は、 二 親は思いたり。 いろいろの支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。 けけろと聞ゆ。これを繰り返して歌いしかば、二親も始めて心づき、 それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、 それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有りたり。 けけろと啼く。はて常に変りたる鶏の啼きようかなと おりこひめこを載せなえでヤマハ 次の日夜の明けたる時、 ヤマハハ 家の鶏羽ば を馬よ ハのせ 今

○糠屋は物おきなり。

の相異あれど、 ヌカボは空穂のことなり。 一九 いう話なり。 遠野郷の 獅 子 踊 に古くより用いたる歌の曲あり。 紅 皿 欠 皿 エピソードにはいろいろの美しき絵様あり。折あらば詳しく書き記すべし。 自分の聞きたるは次のごとし。 の話も遠野郷に行なわる。ただ欠皿の方はその名をヌカボという。 継 母 に悪まれたれど神の恵ありて、ままはは にく 百年あまり以前の筆写なり。 村により人によりて少しずつ ついに長者の妻となると

獅 子踊はさまでこの地方に古きものにあらず。 中代これを輸入せしものなることを人

橋ほめ

まゐり来て此橋を見申せや、 いかなもをざは蹈みそめたやら、 わだるがくかいざる

もの

此御馬場を見申せや、このおんばば 杉原七里大門まですぎはらななりおおもん

門 ほ め

まゐり来て此もんを見申せや、ひの木さわらで門立てゝ、 是ぞ目出たい白かねの門これ。めで

門の戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだいもん

まゐり来てこの御本堂を見申せや、いかな大工は建てたやら

建てた御人は御手とから、むかしひたのたくみの立てた寺也。

小島ぶし

小島ではひの木さわらで門立てゝ、是ぞ目出たい 白 金しろかね の門

白金の門戸びらおすひらき見申せや、あらの御せだい

八つ棟ぢくりにひわだぶきの、上におひたるから松むね

から松のみぎり左に涌くいぢみ、汲めども呑めどもつきひざるもの

あさ日さすよう日かゞやく 大 寺 也、さくら色のちごは百人

天からおづるちよ 硯 水 、まつて立たれるすずりみず

馬屋ほめ

まゐり来てこの御台所見申せや、め釜を釜に釜は十六

十六の釜で御代たく時は、四十八の馬で朝草苅る十六の釜で御代たく時は、四十八の馬で朝草苅る

其馬で朝草にききやう小萱を苅りまぜて、花でかゞやく馬屋なり<sup>その</sup> かゞやく中のかげ駒は、せたいあがれを足がきする。

(

此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし

(~はきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり

しやうぢ申せや限なし、 一礼申して立てや友だつ

われ

桝形ほめ

まゐり来て此宿を見申せや、人のなさげの宿と申まゐり来てこの桝を見申せや、四方四角桝形の庭也

町ほめ

参り来て此お町を見申せや、 竪 町 十五里横七里、\*\*・\*\* △△出羽にまよおな友たつ

○出羽の字もじつは不明なり。

けんだんほめ

まゐり来てこのけんだん様を見申せや、 御町間中にはたを立前

まいは立町油町

けんだん殿は二かい座敷に昼寝すて、銭を枕に金の手 遊でした しょうしょ

高き処は城と申し、ひくき処は城下と申す也ところ しろ 参り来てこの御札見申せば、おすがいろぢきあるまじき札。

橋ほめ

まゐり来てこの橋を見申せば、 こ金の辻に白金のはしがねっじ

上ほめ

○すゞは数珠、りそうは利生か。

家ほめ

こりばすらに小金のたる木に、 水のせ懸るぐしになみたち

○こりばすら文字不分明。

此庭に歌の上ずはありと聞く、歌へながらも心はづかし

おんげんべりこおらいべり、 山と花ござ是の御庭へさらゝすかれ

○雲繝縁、高麗縁なり。

この御酒一つ 引 受 たもるなら、命長くじめうさかよるごしゅ ひきうけ 十七はちやうすひやけ御手にもぢをすやく廻や御庭かゝやく さかなには鯛もすゞきもござれ共、おどにきこいしからのかるうめ まぎゑの台に玉のさかすきよりすゑて、是の御庭へ直し置く

正ぢ申や限なし、一礼申て立や友たつ、京しょう

柱懸り

すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻る庭めぐる 仲だぢ入れよや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすんげない ○すかの子は鹿の子なり。遠野の獅子踊の面は鹿のようなり。

これ の御庭におい柱の立つときは、 ちのみがき若くなるもの

○ちのみがきは鹿 0) 角磨きなるべし。

松島の松をそだてゝ見どすれば、 松にからするちたのえせもの

○ちたは蔦。

松島の松にからまるちたの葉も、 えんが無れやぶろりふぐれる

○びよぼは 屛 風 なり。 京で九貫のから絵のびよぼ、三よへにさらりたてまはす 三よへは三四重か、 この歌最もおもしろし。

めず

ぐり

仲たぢ入れろや仲入れろ、仲立なけれや庭すんげなえ

○めず 鹿の子は生れおりれや山廻る、 ぐりは鹿の 妻 択 びなるべし。 我らもめぐる庭を廻るな

女鹿たづねていかんとして 白 山めじか の御山かすみかゝる

○して、字は〆 《しめ》てとあり。 不明

○うるすやなは嬉しやななり。 うるすやな風はかすみを吹き払て、 今こそ女鹿あけてたちねる

笹のこのはの女鹿子は、何とかくてもおひき出さるでさ、あいしりのと女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねる

女鹿大鹿ふりを見ろ、鹿の心みやこなるもの

奥のみ山の大鹿はことすはじめておどりでき候

女鹿とらてあうがれて心ぢくすくをろ鹿かな

松島の松にからまるちたの葉も、 松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせもの えんがなけれやぞろりふぐれる

沖のと中の浜す鳥、ゆらりこがれるそろりたつ物

なげくさ

なげくさを如何御人は御出あつた、いかなおひと おいで 出た御人は心ありがたい

この代を如何な大工は御指しあた、四つ角て宝遊ばしょ。いか

この御酒を如何な御酒だと思し召す、 を如何な銭たと思し召す、 伊勢お八まち銭熊野参 おどに聞い しが 菊 の遣ひあまりか の酒

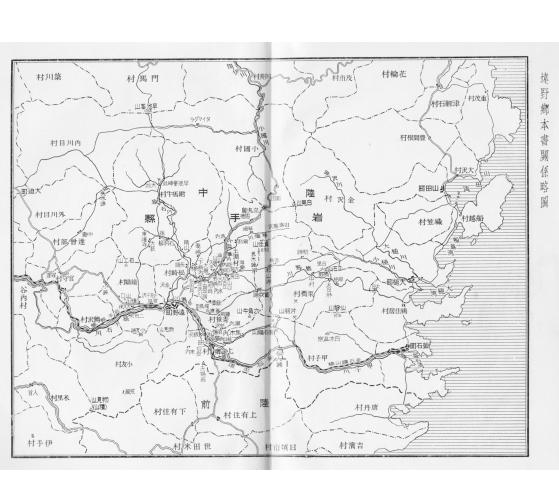
○播磨檀紙にや。 此紙を如何な紙と思し召す、 はりまだんぜかかしま紙か、 おりめにそたひ遊はし

りめにそたかさなる

○いぢくなりはいずこなるなり。三内の字不明。仮にかくよめり。

あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮、内てすめるはかなめなり

お



## 青空文庫情報

底本:「遠野物語・山の人生」岩波文庫 岩波書店

1976(昭和51)年4月16日第1刷発行

2007 (平成19) 年10月4日第47刷改版発行

2010(平成22)年3月5日第50刷発行

※図版は、 「遠野物語増補版」 郷土研究社、 1935 (昭和10)年7月31日発行からとりまし

た。

入力:Nana ohbe

校正:阿部哲也

2012年12月16日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、 青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られ

ました。入力、 校正、制作にあたったのは、 ボランティアの皆さんです。

## 遠野物語 柳田国男

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/